

---

# **仮面ライダー × リリカルなのは 転生者の名は仮面ライダー**

マーぼー豆腐星人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダー × リリカルなのは 転生者の名は仮面ライダー

### 【Zコード】

N2177S

### 【作者名】

マー・ボー(豆腐星人)

### 【あらすじ】

ちょっとだけオタクな少年、小野寺一真が自らの命と引き換えに子供を庇つて死んでしまった。

しかしそのことに興味を示した神様の力により転生した先はなんとリリカルなのはの世界だった。さらに彼には仮面ライダーへの変身能力も授かっていた…。

そんな彼がリリカルなのはの世界で歩き出す物語とは！？

## 第0話 プロローグ（前書き）

この作品は完全に作者の自己満足です。よって原作とは異なる展開になる可能性があります。それプラス文章表現諸々の下手、更新の遅さに定評のある作者ですがそれでも良いと仰ってくれる方は見ていてください。お願いします！

コメントは気軽にしてください。注意点などもドンドンお願いします！

## 第0話 プロローグ

俺は小野寺一真。<sup>おのでらじかずま</sup>ついさっきまでは何処にでも居るやつな普通の…  
ちょっとオタクの高校生だつたんだ。俺が今居る所は日本、  
いや今までの世界の何処でもない場所ミシードナルダだ。本当に  
らここは『魔法少女リリカルなのは』というアニメの世界の場所だ  
つた。

そこに俺がいることは理由があつた。

「まさか本当にひなるなんてな…」

俺は呟き、つい先ほど余話を思い出す

「あれ、こっちは？」

俺は気付いたら辺り一面真っ白な所に居た。おかしい、確か俺は

「やつと田が覚めたよつだね」

不意に後ろから聞こえた声に俺は振り返る。そこには白いロープの  
よつなのを身に着けた少女が居た。

「君は…誰なんだ？」

第一声がそれだった。もつ少しマシな言葉が出てくれば良かったのだが、俺にそのような事は期待しない方がいい。しかも今は内心結構焦ってるからな。少女はそんな俺を見てクスリと笑った。

「ああ、僕は翠。」それでも一応神の端くれさ。まあ落ち着きなよ

俺とは反対に翠は冷静な態度で俺の質問に答えた。その態度のおかげか俺は少しづつ落ち着きを取り戻した。神?まあ何かの聞き間違いだろ。

「そ、そうなのか…で、俺がここに居るのは何故だ?」

「それには訳があつてね。僕も神の端くれと言つただろう?神にも種類があつてね、僕は生命を扱う神なんだ」

…これはどう反応したらいいの!初対面の人によく私は神です』ってヤバくね!ああ、そつか俺は夢見てるんだ。そうだ、だから痛い子と遭遇してると田を覚ます。痛つ!コイツ、俺を「何バカなこと考へてるんだ」みたいな田で見ながら脛蹴りやがつた!

蹴られた脛を押さえる俺をスルーして翠は再び話出した。

「いつものように僕が下界を覗いてたらちょうど君が幼い少年を事故から庇うのを見てね。君は端から見ても重傷でそれはもう酷く時間も無く死んでしまったよ

ああ、あれか。あの子助かつたんだ、良かつた…ってちょっと待てえ!

「俺死んでたのつー?じゃあここに何処つ!?」

まさかの衝撃力ミングアウト!?.ちょっと待つてよ!俺帰つて録画してた仮面 イダー見たいのに!何でつ!?.Why!?

「今からそれを説明しようとしたんだが 」

「えつ!?.ホントに死んでる!?.だけど痛覚はあつたし、けじわつちからなんかふわふわしてるし、あれ?でも

パニックになつて自分でも何がなんだか分からなかつた。そのとく俺の視界が真っ暗になつた。な、何だ!?

「落ち着いて、ゆつくりでいいから。そうしたら僕の話を聴いて欲しいんだ」

翠が俺の頭を優しく抱きしめていた。“大丈夫”と言い聞かせるよう。情けないことに俺はそれに甘えてしまった。  
しばらくして俺の気分が落ち着いた頃に腕を離した。

「……ゴメン。まさか自分が死んでたとは思わなくて」

翠に抱きしめられて、かなり恥ずかしかつた。けどそれ以上に感謝していた。あのまま放置されたら俺はずつと喚いてただろ?からな。

そんな俺を見て再び翠が口を開く。

「フフツ、別にいいや。じゃあ話をもどして…僕は君に興味が沸いたんだ。人間は結局、自己保身ばかり考える人が大半だと思つてた

からね…少なくとも僕が見てきた人間はそうだった、けれど君は違つた。君は少年が危ないと分かると一目散に少年のところへ駆けていった。そして自らの命と引き換えに少年を救つた…そのことに僕は興味が湧いたんだ。そしてこの空間に魂を呼び寄せたんだ」

俺は翠に興味を持たれたようだ。そして俺は今の話を聴いて本当に翠が神であるうと思つた。

「…そうだったのか…けど俺も自己保身に奔るときもあるぞ」

一番大事なのは自分自身、そう思つてゐる人は殆どであろう。俺も例外無くそうだ。ただあの時は体が動いていたんだ、俺が一瞬だけでも『助けたい』って思った時には。

「そうかもしれない。だが君が命を投げ出して他人を助けたことに変わりは無いからね、僕にはそれで十分君という人間が分かつんだ。さて、じゃあここからが本題だ」

そう翠が言つと俺の目の前に白く輝く球体が現れた。なんだこれ? いきなり出てきたぞ。

俺はつい後ろへ一步下がる。

「それは鍵さ。新しい世界への鍵。君が行きたい世界を思い浮かべるんだ」

「へ?新しい世界の鍵つてどういふことだよ?」

(いきなりそんなこと言われても俺には理解できないんだが…)

そう思つてみると翠は「簡単にいうと…」と言つて再び口を開いた。

「まあ転生のよつなものだ。ただ君の姿と記憶は生前のままだけどね」

転生ー…じゃあ俺はまた生き返れるのか！

「ああ、元の世界はやめておきたまえ。君は死んだことになつてゐるんだ。悪いけど事故そのものが無かつたことには出来ないから既に死体は火葬されてるだろ？」

「俺の体ーーっ！？」

俺は叫びその場に蹲る。だつて自分の体がもう燃やされましたと言われたのだから。けど他の世界で生き返れることに変わりはない。こつなつたらむづ前向きに考えよっ！

( 転生か… そうなると俺が望む世界は )

「リリカルなのはか仮面ライダー剣、どつちかなんだよなあ

と呟く。

ヲタ脳全開。異論は認めん！俺が行つてみたいと思つたのはこの二つのー！

なのはの世界だつたら魔法とか使えたらいいとか、なのはやフヒイト達と仲良くなれたらなあとが思うし、剣の世界だつたらライダーになりたいしダディに会つてみたいし。

すると翠はその呟きを聞き逃さなかつたりじへんしていつ頃つてきた。

「じゃあその両方を叶えてあげるよ

「えつ？」

「どうこうとか聽こいつと思つたときには目の前の球体が激しく輝き、俺は意識を失つてしまつた。

ついことで俺は無事リリカルなのはの世界へと転生した。正直呆気無さ過ぎだつた。そして俺の手元にはブレイバックル、ギャレンバックル、レンゲルバックルの三つがあつた。

「本物…だよな。マジで両方やつてくれたのか……翠、ありがとな。俺に新しい生命をくれて。まあお前が興味を失わないような生き方するからよ」

まさか死んでいるとも、そして生き返れる（まあ転生だけど）とは思つて無かつた。一年前、両親と死別してからあまり人とも関わらなかつた俺には今までの世界への未練はあまり無い。強いて言うなら彼女ぐらい作りたかつた…これぐらいか。ま、それもこれから考えていけばいいか。

翠への感謝の気持ちと新しい生き方への期待を胸に俺は新しい世界を歩き出した。

僕は誰も居なくなつた場所で再び下界を覗こうとしていた。  
そのとき

「つー?」この感じは……彼が行つた世界に不穏分子<sup>イレギュラー</sup>が紛れ込んだのか?」

すぐに確認すると確かに不穏分子<sup>イレギュラー</sup>が紛れ込んだようだ。だが僕の力では転生させることは出来てもその世界への干渉は不可能だった。僕は唇をかみ締めた。これほどまでに自分の力不足を恨んだことは無い。

「……だが彼には戦う力がある… すまない小野寺君、君の力で解決してほしい」

翠は独り呟いた。

その不穏分子<sup>イレギュラー</sup>を一真はまだ知らない

## 第0話 プロローグ（後書き）

どうも、作者のマーぼー豆腐星人です。久々の小説投稿で緊張がヤバイですw

この作品は作者の自己満足の塊であり、せらに文章力皆無&更新の遅さに定評のある自分が書いております。故にいろいろ問題点や疑問点、原作との相違点があると思われます。そのときは遠慮なしにコメントしてください!反省点を活かしまともな作品にしていきたいと思っております。

こんな自分の作品ですが、どうぞ宜しくお願いします!

## 第一話 少女を救う仮面の騎士（前書き）

作者「懲りずに再び投稿しました～早速自己満足全開です」

一真「おいコラ早すぎだろ。文も下手だし。もっと上手に書けないのか？つまりんぞ」

作者「べつにしていることを…」いつなつたひ「

一真「えっ？ ちょっと、体が消えてー…」

作者「へッヘッヘ、俺に逆らはしない運命なのだー」

一真「…お前主人公消してどうすんなー…？」

作者「まあ見苦しい点が多いですがどうか見て行ってください」

一真「無視すなーーー！」

## 第一話 少女を救う仮面の騎士

「さてと、ここは一体どちら辺なんだろうか?」

そう言つて辺りを見渡すものここがどこなのかはよく分からなかつた。ただ前方に空港らしきものがあった。が、そこは火の海になつていた。

「うおっ、火事だ!…行つてみるか。もしかしたらこの場所がどちら辺か分かるかもしれないし」

そう言つて俺はこれまたすぐ傍に置いてあつたバイク ブルースペイダーに跨る。単車の免許は持つてないが…親父がよく乗り方教えてくれてたから運転はできる(よい子はちゃんと免許取ろう)。俺は燃えている空港らしき施設へ向けてバイクを走らせた。

「これは凄いことになつてるな」

空港らしき場所に着いた俺は開口一番そう呟いた。だつてあれだよ、火の大きさが半端ない。ガスタンクが爆発しないと いや、それよりも上か?こんなことにはならないぞ。

そう考えていた俺の耳に救助隊員達の声が聞こえた。

「おい!中にまだ要救助者がいるんだ!早くしろ!」

「分かつてる!だが火が強すぎて突入できない!」

(まだ中に入が！？)

そう思つた俺はすぐさま飛び出そつとした が、俺一人ではどうしようもなかつた。

そのとき俺はふと思い出した。アレが本当に使えるのならもしかしたら、と。

そう思い俺はバイクから翠からもらつた物の一つ、ブレイバッклを取り出して腰に装着した。

「頼む、上手くいってくれ……変身！……！」

『Turn Up』

俺はバッカルの『ターンアップハンドル』を引いた。するとバッカルの『ラウズリーダー』が回転し青色の光のゲート『オリハルコンエレメント』が発生し俺を通過した。

「上手く…いったか！」

そこには仮面ライダーブレイドへと変身した俺が立つていた。

「よしひ、コイツなら火の中でも大丈夫だろ。さて、行くぜー！」

そう言つて俺はバイクに跨り『マッハジャガー』をスキヤンし、マッハスペイダーを発動させ炎の中に飛び込んでいった。

(くそつー想像してたよりも中は酷いことになつてるな。天井が落

ちてきそうだ、これは長くもちそうにないな

俺は空港の中をバイクを加速させた。

そして先へ進むと要救助者を見つけた。しかし要救助者達は俺を見て驚いていた。まあ当然だろうなあ。

その要救助者達の周りにはバリアが張つてあった。

(一体誰が…と、それよりも助けなくちゃ…)

「大丈夫か！？待つてろ、すぐこの火をなんとかするから！」

が、俺は言つてから気付いた。

(あれ、なんのカードを使えばいいんだ？…しまった、ここはレンゲルになるべきだった！)

俺が一人で混乱していると要救助者の一人が口を開いた。

「あ、あの。魔導師の女の子がバリアを張つてくれて。それから妹を探しに行くつてあっちに」

その指は俺の背後に広がる壁のような炎に向けられていた。なんて無謀な　つて、俺も同じぐらい無謀だったな。

「分かった、俺が探して　つて、その前にここを何とかしないと  
ーっ！」

俺は叫んだ。そこへ一人の魔導師が文字通り飛んできた。

「時空管理局です。もう大丈夫ですよ　ところあなたは？」

魔導師が俺を見ながら尋ねた。

あれ…この人つてもしかしてフェイト・テスターッサ…だよな。俺の知ってる姿と比べてかなり大人びてるけど雰囲気とか髪型とか声で分かる。

と、それよりも質問に答えない…ふむ、じゃあここはあの一言を。

「通りすがりの仮面ライダーだ」

フェイトは頭の上に『?』を浮かべていた。ですよね。実際に言うと結構恥ずかしいな…。

「ま、まあそんのはどうでもいい、それよりもあっちにまだ妹さんを探しに行つた魔導師が一人居るんだ。俺が探しに行くからここの人たちを頼めるか？」

本音は俺じゃこの人数を運んだりは出来ないからなんだけど。

「…分かりました。お願ひします」

フェイトは真面目な顔で答えた。その顔には俺に任せても良いのか？　という疑問が浮かんでいたが。

「任せろ。絶対に助け出してみせる」

そう言って俺は奥へバイクを走らせた。

「…仮面ライダー、か」

フェイドは救助者を運びつつ呟いた。

「どーだ、何処にいるんだ魔導師の女の子」

この空港はかなり広かつた。そのせいでなかなか魔導師の女の子が見つからない。

ここにはいないのか、と思つたとき。

「あやあつー」

爆発音とともに微かに悲鳴が聞こえた。

「女の声…まさか…」

俺は声の聞こえた方へと向かつた。

「見つけた！」

少女は螺旋状の通路にいた。

(マズイ…早くしないとここも危ない…)

「君…そこを動かないで…今助けに行くから…」

少女は俺の声に反応しきりの向いた。

(よし、そのまま何事も起らぬなよ…)

しかし、俺の願いは虚しく通路は崩れ始めた。

「さやああああつ…」

「なつ…くそつ…」

少女の悲鳴が聞こえる中、俺はバイクから下りて少女の方に飛び出した。そして腕に装備されていた『ラウズアブソウバー』にΩのカードを挿入し、カードをスラッシュした。

すると俺 ブレイドの鎧は金色に変化し背中に翼が装着され『仮面ライダーブレイド ジャックフォーム』に強化変身した。

「うおおおおお、間に合えーーーっ！」

俺は少女に向け、飛んだ。

「ハアハア…だ、大丈夫か？」

「え、ええ。あ、ありがとうございます…」

俺は少女を抱きかかえて空中を飛んでいた。危ねえーーっ！咄嗟にジャックフォームにならなかつたら今頃どうなつてたか。まあ、女の子も無事に助かつたから良かつた良かつた。

「ゴメンな、来るのが遅くなつて。もう大丈夫だ」

少女は怯えてるのか戸惑つているのか何も言わなかつた。まあ仕方ないよな。

「二人とも大丈夫？」

そこへフェイトがやつて來た。つーか早いな、おい。もしかしてこの子も一人で助けられたんじゃないのか？

「ああ、なんとかな…」こゝもそろそろヤバイ、せつせつと脱出しようぜ

「分かりました。じゃあ君、私が運んでもらおいで

そう言つて女性は少女を抱きかかえる。じゃ、さつあと行きますか。俺とフェイトは出口へ向けて飛んで行つた。

「妹さんの名前は？どちらへ行つたかとか分かる？」  
飛んでいるヒュエイトが抱きかかえている少女に話しかけてた。

「あの、エントランスホールの方で逸れてしまつて。名前はスバル・ナカジマ、11歳です」

そう言つたといひでどこからか俺達とは別の声が聞こえてきた。

『「ひら通信本部。スバル・ナカジマ、11歳の女の子、既に保護されています』

どうやら通信らしい。その内容を聞いた少女の顔から不安の色が消えた。

『救出者は高町教導官です怪我もありません』

少女の前に画像が現れた。その画像は白い魔導師——高町なのが救出した少女を救急隊に引き渡している画像だった。

「スバル…良かつた」

妹の無事が分かり、少女は涙を流した。その顔は笑顔だった。フュイトは本部へ通信を返しているのでそのタイミングを見計らつて俺は少女に声を掛けた。

「良かつたな、妹さんが無事で」

「はい、本当に良かつた……先ほどは助けて頂いてありがとうございました」

「え、ああ。当然のことだから気にすんな。といひで君は俺の姿を見て驚かないのか」

普通は何かリアクションあると思うんだけどなあ。さつきから何も言われないんだが。

「助けていただいた方に驚いたりはしません。かつこいとは思いますが」「

カツコイイー？おお！仮面ライダーはやっぱカツコイんだ！くそ、仮面ライダーになれ最高だぜ！」

「君、お名前は？」

そこにフェイトの声が聞こえた。そういうやこの娘の名前聞いてないや。

「ギンガ、ギンガ・ナカジマ陸士候補生、13歳です」

ふうん、ギンガ・ナカジマって言つのか。覚えておくか。

「候補生か。未来の同僚だ」

「き、恐縮ですか…」

「えっと、じゃあ貴方は？もしさ『仮面ライダー』って言つたけど」

フェイトが俺に尋ねてくる。流石にさつきの説明じやなあ。

「俺は小野寺一真、民間人だ。勝手に救助活動しちゃって悪かったか？」

「そんなことあつません、逆に助かりました。といひでその姿は？」

やつぱり説くよね普通。

「まあ色々と面倒くさい事情があつて…バリアジャケットと思つてくれ」

そう答えて俺達は出口に向かつて飛んで行く途中に思に出した。

「バイク忘れた…！」

俺はフロイトに「忘れ物した、先に行つて」と一方的に言つてジヤガーマッハを発動して超高速で中へ戻つて行つた。

「…小野寺一真さん、か」

ギンガはポツリと呟いた。

## 第一話 少女を救う仮面の騎士（後書き）

最初に言つておく！（後書きなのに）俺はかーなりヘボイ！  
今回から本編に入りました。時期はStrikersのプロローグ  
の辺りです。

結構無理やりな展開が多いと思われるのでアドバイスや感想をお待ち  
してます。どんどん下さい、遠慮はいりません！  
更新速度は相変わらず遅いです。

オリキャラ設定 8月16日更新（前書き）

作者「いや～最近ギャルゲーにハマって攻略に大忙しだよ～」

一真「おいおい、ダメな人間がもつとダメになるぞ」

作者「ああ？」

一真「ったく、ただでさえ酷い作品がもつと酷くなるぞ」

作者「…お前、もう一回殺すよ」

一真「『メンなさ————！』」

## オリキヤラ設定 8月16日更新

### オリキヤラ設定

小野寺一真 15歳（本編開始時） 男性

#### 立ち位置

この作品の主人公。

#### 詳細

元々現実世界に居たのだが子供を事故から底い死んでしまう。だがその行動に興味を持つた神である翠により魔法少女リリカルなのはの世界に転生する。

大の仮面ライダー好きであり転生した際に仮面ライダーブレイド、ギャレン、レンゲルへの変身アイテムと変身能力を得るが、専ら変身はブレイドである。リリカルなのはも好きだが2期までしか見たことが無い。

転生前は中学までは剣道をやつていて部内でもそこそこ上手かつたが高校に入学してからはバイトをするため剣を置き、帰宅部だった。その理由は高校入学直前に両親が不慮の事故で死亡してしまい、生活費を稼ぐために日々バイトをしていたからである。そのせいか家族や仲間というものに対して強いこだわりを持つ。

#### 性格

考えるよりも行動する性格でお人好し。さらに単純な思考をしているが、いざという時には咄嗟の判断が出来る。ギンガとの交流で『一手先』を考えるように心がけている。が、相変わらず突っ走ることが多い。

#### 外見

黒髪のツンツン頭（某不幸な少年とは違う）。背丈は170ぐらい。

顔はイケメンではないが割と整っている。

アッシュ・レーゲン 15歳 男性

立ち位置

親友、悪友

詳細

入学してきた一真と寮が同室の少年。

騒ぐのが好きでいつも派手なことを実行しようと考へてる。  
使用デバイスは一般的な練習用ストレージデバイス（色は変えてい  
る）。

外見

金髪で肩まで架かる長さ。

背は一真と同じくらいかそれよりちょっと上。

眼つきが少し鋭い。結構イケメン。

性格

お調子者で騒いだりするのが好きだが本質的な部分は割りと真面目  
だつたりする。

好きなことに対するかなりの集中力を發揮できる。

リイナ・ウェーバー 12歳 女性

立ち位置

ヒロインその2

詳細

ギンガの友人。人見知りで初対面の人とは一人ではなかなか「コミュ  
ニケーションが取れない、だが気を許した相手なら流暢に喋れる。

使用デバイスは盾型の『アルテミス』

外見

黒髪のロング。スレンダーなスタイル。  
どことなく和風な感じがする

性格

少々ドジなところもあるが性格は心優しく、周りのことを優先して  
考えている。

これからも追記していく可能性大。

## オリキャラ設定 8月16日更新（後書き）

今回はオリキャラ設定です。

と言つのも、前書きで触れているようにギャルゲーにかなーりハマリまして文章がまだ出来上がってないためです。

来週にはちゃんと出来ているようにしますので今回は大目に見て下さい。

ちなみに更新ペースは一週間です。感想、コメント遠慮無く。

## 第一話 陸佐と対面（前書き）

作者「今日はリアルに文章が酷いです。自分でも驚くぐらいです。  
私が三流なので多めに見てください。お願ひします」

一真「おこおこしつかりしないよ。三流なつのプライド見せよう」

作者「分かった…次はしつかりと内容整理してからにするよ」

一真「あれつ、随分張り合いで無いな　っておーーー何処行くんだ  
よーつおーい！」

## 第一話 陸佐と対面

あの後俺はブルースペイダーを回収し、中から脱出した。幸いブルースペイダーに目立つた損傷は無かつたためにすぐに動いた。

そして俺が外に出てきたとき（変身したまま）

「そこの君！」

呼ばれて振り向くとそこにフェイトが居た。どうやら救助は終了したようだつたようで俺の方へ歩いてきた。

「あ、さつきの…ええと」

「私はフェイト・T・ハラオウン執務官です。君は確か…小野寺一真君だよね？」

「はい。先ほどはありがとうございました」

そう言つて俺は軽く頭を下げる。名前は元々知っていたが初対面の人名前を知られていたら変なのであえて知らない振りをした。

「感謝するのはこちらです。先ほどの救助支援、感謝します。それと君にお礼を言いたい人が居るんだけれどいいかな？」

俺にお礼？さつきの娘かな？折角だから会つてみるか。

「大丈夫ですよ、フェイト・T・ハラオウン執務官」

「そつか。じゃあ付いて来て」

俺がわざとじりじり言つてフロイトは軽く微笑んで案内してくれた。

(いや～やっぱりフロイトは優しい人だなあ)

しみじみ思う俺であった。

俺がフロイトに連れてこられた所には指揮車があり、そこに一人の男性が立っていた。

「あの方だよ。じゃあ私はいろいろと報告とか残つてるから」

「もうなんですか。いろいろありがとついでござました」

俺はフロイトと別れて男性の元へと歩いていった。

「わざわざ悪いな。俺は時空管理局陸上警備隊第108部隊長ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐だ、よろしく」

「あ、俺は小野寺一真です……ってあれ、ナカジマって確か…

「ああ、お前さんが助けた子供は俺の娘だ。ま、お前さんも十分子供だがな」

そう言って彼は苦笑した。俺はとこりとまさか助けた子の親が目の前にいるという状況に焦っていた。

(な、何だ？この独特的居心地の悪さは。高校とかバイトの面接の時の感じとは違うぞ！？)

なぜ例えがそんなものなのかといふと、俺が短い人生を経験した中でこの二つがかなり緊張していたからである。

「まあそれは少し描いといてだ…お前さん、民間人だらう。なぜ民間人があのよろくな装備を持つていたんだ？」

痛い所を突つこまれた。俺は元々この世界の住人では無い。無理に辻褄を合わせようとしてもすぐにボロが出てしまうだらう。

(下手な考え方をすると後々面倒なことになるな…)

「えっと、実は俺

そう思つた俺は正直に話すこととした（ここがアニメの世界であるといふことは伏せておいたが）。もしかしたらそっちの方が面倒くさいことになつたのかもしれない。が、俺はそんなことは一切考えていなかつた。

「なるほどなあ…まあ信じがたいことではあるが、信じられないことでは無いな」

あれつ、意外と分かつてくれた！？絶対真っ向から否定されると思ってたのに。

「あれ、否定とかしないんですか？正直自分でも分かつてくれると  
思つてなかつたんだけど」

俺がそつ言つとゲンヤ陸佐は苦笑しながら

「俺の知り合いにそつこつた方面の奴がいてな。随分慣れちまつた  
ぜ」

と答えた。そして俺の頭の中に一人の少女の姿が浮かんだ。

(もしかして…はやてのことかな?)

「そつなんですか。といひで…」

「ん？ああ、ギンガのことか。あいつなら一応念のために病院だ。  
まあ怪我も無いし明日には退院できるはずだ」

「無事なんですね？あ～良かつた」

そういうや妹さんも救助されてたな。姉妹そろつて無事で良かつたよ。

「その件については本当に感謝している。俺にはもうあの二人しか  
残つてないからな…」

「えつ？」

もつあの二人しか残つてないって、ビツコウことだよ？

「うと、スマン。忘れてくれ。そいやもう一人お前さんと会いた

い奴がいるんだ。会つてくれないか？」

「今は追及しない方がいい気がするな。それよりもまた俺に会った  
人がいるのか…」

「分かりました。で、どこに居るんですか？」

「あんたの後ろや」

その声は俺の真後ろから聞こえた。振り返るとそこには俺の知つて  
いる人物

「初めまして、 やな

八神はやてが居たのであった。

## 第一話 隆佐と対面（後書き）

今回は私情（合ひでる・）のせこもあり内容、文章共に酷いです。後日ゆっくりと考えて修正したいと思つております。

もう少ししたらなのはとかも出て来ると思いますので今しばらくお待ち下さい。

アドバイス、指摘などのコメント受け付中です。

## 第三話 サヤヒカコム（前書き）

だんだんと内容が酷くなつてしまふ...。  
これでも頑張つてゐつもうです（泣）

## 第三話 はやてとカリム

あの後俺ははやてによつてなのは、フロイトに会つた。あんまり時間がそれなかつたが楽しく会話ができた。二人とも大人っぽくなつて少し照れた。

次の日、俺ははやてに連れられて聖王教会本部にやつってきた。どうやらそこのお偉ごさんから会つてほしこのことらしご。

(「これは管理局と同じく、危険なロストロギアの調査と保守を使命としている宗教団体……」とははやてに聞いたけど、一体何が違うんだ?)

そんな事を考えつつ俺ははやての後を着いて行つた。

「初めまして、私は聖王教会教会騎士団騎士、カリム・グラシアです」

部屋に通された俺とはやはやては聖王教会のトップである騎士カリムと面会した。しかもこの女性ははやての直属の上司らしこ。

「俺は小野寺一真です。といふで……どうしてここに呼ばれたのでしようか」

はやてが言つていたがなのはやフロイトはまだ彼女と会つたことが無いこと。いいのか、俺が会つても?

「それは今から説明します」

そつ言つて彼女は椅子から立ち上がりカードとも札とも言える紙を空中に展開させた。おお、凄え。流石リリカルなのはの世界、何があつても不思議じやない。

「これは私の稀少技能、預言者の著書です。<sup>アスクル</sup><sup>プロフェーティン・ショリフラン</sup>最短で半年、最長で数年先の未来を、詩文形式で書き出した預言書の作成を行う能力です。ですが、預言の中身は古代ベルカ語で、しかも解釈によつて意味が変わることもある難解な文章に加え、世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度ですが」

そう言つて彼女は苦笑する。俺としてはそんな能力あつたら嬉しいがな。東海大地震とか予言できるし。

「けど、大規模災害や大きな事件に関しての的中率は高く、管理局や教会からの信頼度は高いねんけどな」

と、はやはては言つた。するとカリムは少し照れた表情をしながらもそこから一枚の紙を取つた。

「これにはこいつ記されています。”異なりの空から黒き意思現る。世が黒に染められる時、仮面の騎士が光をもたらす”と」

仮面の騎士…まさか！

「まあ分かつとるやうつけど、それはアンタのことや」

俺は一応自分がどうしてここに居るかを一人に話した（やつぱりこ）がアニメだとこいつとは伏せて）。そして”仮面ライダー”的も。そうしたらカリムが「でしたら私が何とかしましょ」（）と書いて部屋を出て行った。

（思つてたよりも話しゃすそな人だな。これなら多分なのは達もすぐに仲良くなれるだろ）

ビーでもいい事を考えていた俺にはやでが話しかけてきた。

「なあ、アンタが元いた世界つてどんなところなん？」

元いた世界か…普通だな、普通。少なくとも俺の見てきた限りでは普通だ　と答えたたら少し不満そうだった。「そんなんちやうくてやな　」と言つたところでカリムが戻ってきた。

「貴方の戸籍を作りました。とりあえず身柄は聖王教会が保護する、とこう事になりました」

「あ、ありがとひざわこますー。」

おおつー・まさかこんな簡単に事が進むとは思つてなかつたぜ。

「で、これからどうするつもりなんや?..」

はやじが訊いてくる。そんなの決まつてゐるわ。

「無理かもしねないけど…管理局に入りたい」

「ふふつ、あんたならひつぱりと黙つたわ。じゃあ先ずは”魔力資質”があるか確認せえせんとな」

カリムも「そうしたほうがいいわね」と言つて賛成した。あれ、俺魔力とかそーゆーの無いと思うんだけど…無かつたら入れないのかな?ヤベツービーしょー?」

少し不安になつてゐる俺ははやてに引きずられるよつと部屋を出た。あれ俺どこ連れてかかるの!…つかはやでせん足完治したんですねー。

「うえー、ようやく終わったか…精密検査なんか受けたの初めてだ

検査からようやく開放されて病院から出た俺は深呼吸する。やっぱり外の空氣の方がいいな。

どうやら俺は信じられないことに魔力資質があつたようだ。<sup>多分翠</sup>が何かしてくれたんだろうと俺は思う。流石になのはやフュイト程の魔力は無かつたが一般的な魔導師と比べたら結構多いらしい。そこで俺は第四陸士訓練校つて所に入学することになつた。これもはやてが手を回してくれたらしい。ああ、まだこの世界に来て一日目なのにもう頭が上がらないぜ…。

## 第三話 はやととカリム（後書き）

よつやく次ぐらいから戦闘描写とか書けそうです。  
指摘などの意見待っています（改善点とか教えて欲しい）

## 第四話 変身！仮面ライダー・ギャレン（前書き）

あと一週間で中間テストだあ。嫌だー！

## 第四話 変身！仮面ライダー・ギャレン

はやてが「ちょっと用事あるから適当に観光しどう〜」と言ひてどこかへ行つてしまつたため俺は言われたとおり適当にふらりとこにした。早く道や町などを覚えないといろいろ不便だろ？と思つたからだ。

しばらく歩いていると俺を知つてゐる人物と遭遇した。

「あなたは…あの時の」

「あ…ギンガさん」

その人物とは昨日俺が空港から助けた少女、ギンガ・ナカジマだつた。せつかく会つたのだから少しぐらい話してしたいと思ったため「少し話がしたいんだけど大丈夫かな？」と訊くと向こうも俺と話したかつたらしく近くのベンチへ移動して話すこととした。

「あの、昨日は本当にありがとうございました！あのままだつたら今頃私はスバルとも会えなくなつてしまつので…」

先に口を開いたのはギンガだつた。まあ俺は向こうが言つだらうことは大体予想できたので　　といつよりこれしかないと、俺でも分かるわ。

スバル…ああ、妹さんか。そいや無事つて知つて泣きそうになつてたな。多分スゲー仲良いんだろうな…俺には兄弟居ないからよく分からんけど姉妹つてこいつゆうものなのかもな。

「そのことならもういいよ。それより怪我とかなかつた？」

「はい、大丈夫でした。心配してくれてありがとうございます！」

(うう…)

俺はつい顔を逸らす。なぜなら…今のギンガの笑顔が可愛かつたからだ。正直、こうゆうのに慣れてない。女子とかとあんまり話さなかつたから耐性とか無いからな。

俺が話を逸らすために思考を巡らせていると少し遠くから「ギン姉ーっ」と呼ぶ声が聞こえた。その声を聞いたギンガが顔を向けた方へ俺も向くとギンガに似た活発そうな女の子が駆けて来た。その後ろにはなんとゲンヤ陸佐もいた

「スバル！お父さんも」

なるほどな、この子がスバルか。良く似てるな。

スバルがギンガに飛びつき遅れてゲンヤ陸佐がやってきた。

「おお、お前さんも一緒だったのか。どうした、こんなところに用でもあつたのか？」

「まあ、俺の魔力適正の検査とか訓練校の入学とかの手続きらしいです。俺もよく分からぬ間にはやてに連れてこられたもんで」

そう言つて俺は苦笑いをする。ゲンヤ陸佐は「アイツも強引なところあるからな」と言つて同情する顔で見てきた。陸佐も苦労したんですね…。

「そりいえば魔導師じゃなかつたんですね。訓練校に入るんですか？」

「やつらじこな

ギンガが訊いてくるのでそれに答える。俺としては普通に答えるだけのつもりだったのだが

「どこの学校に入学するんですか？陸士校ですか？空士校ですか？」  
それとも？」

「ちよ、ちよっと待つてー早い、早すぎるよギンガさん！」

「おい、何だこのマシンガントーク！思わずカイさん（ガンダムの）になっちゃったじゃねえか！」

俺はギンガに「一つ一つゆづくりと頼む」と言つて会話を再開させた。何か最近女性に押され気味なんですか？……どうした？笑いたければ笑えよ……笑うなあ！（矢車風）

あの後用事が残っていたらしく三人と別れたのだが、なんとギンガが連絡先を教えてくれた。女子のメアドとかを今まで貰つたこと無かつたのでスグ嬉しかった。ヒヤツホーイ！  
スバルって子も元気そうな子だった。俺よりも一年下らしい。もしかしたら俺の後輩になつたりしてな。

「そんなことがあつたんか。なんやーこの世界に来て一田田で早速ナンパか？」

「何で！？今の何処にそんな要素があつた！？」

俺が先ほどの出来事をはやてに話したら……「だよ。何でそつなる

のかまったく分からぬ。

俺ははやてから顔を背けつつ歩いてた。そーいや、なんか都心みたいな感じだな、ソレ。車とか結構多いしな。

「あやあー！、ヒリちゃんー！」

聞こえた声のした方に振り向くと一人組みの男が幼い女の子を抱いで車に乗り込んでいた。女の子の親と思わしき女性が走り寄るが車は発車してしまった。

「誘拐！？そんなことがこの世界でもあるのかよ！意外だな」

「そんなんゆうてゐ場合ちやうやう！」ちら八神はやて一等陸尉です、至急応援を…はい、よろしくお願ひします

本音が出てしまつた俺に釘を刺しつつ応援の要請をしたはやは騎士甲冑を装着し「ここで待つとき」と言って車を追いかけて行つた。  
(やうはいかないぜ…俺は仮面ライダーだ、ちょっと片付けてやるぜー)

そう思つた俺は幸運にも近くの駐輪場に停めてあつたブルースペイダーを見つけて出し、すぐにはやてを追いかけた。

しばらく走るとテレビのレポーターがカメラに向けて報道していたので近寄つて話を盗み聞きしてみた。すると誘拐犯がとある店に立て籠もつているらしい。もちろん女の子は人質だ。そのせいかなかなか手が出せない状態らしい。

(モーいやはやての魔法って広い範囲に影響するやつ多いからなあ)

はやての魔法は大きい（派手な）やつが多いから人質に当たるかもしれない。

「ちょっと面倒かもな…あつ、何しどんねん…待つときつて言つたやろ！」

はやてに見付かった…どうする？

- ・逃げる

- ・言い訳する

- ・ゴメンなさい

- ・もう一回転生できるかな？

ダメだ。選択肢が死んでる。

「今結構マズイことになつてんねん。危なくなるかもしれんから早く離れるんやー！」

結構マズイか。はやてですらそつと思つとは本当にマズイかもしれないな　俺はそう思いはやてに聞き返す。

「何がマズイんだ？はやての腕前なら大丈夫じゃないのか？」

「普通やつたらうなんや…けど、今回のは普通じゃないんや

普通じゃない？…どうこうことだ。

俺は犯人が立て籠もつてゐる建物の中を覗くとそこには俺の知つてゐる者達がいた。

「シヨツカ－戦闘員！？なんでこの世界[...]？」

黒ずくめの全身タイツと覆面、骸骨のような模様。間違いない、奴等はシヨツカ－戦闘員だ。

「知つてゐるんか？…どうやらあの建物の中に予め居つたりして数は最低十人や。しかも建物全体に強力なAMFを張つてゐる…つまり魔法が使えないんや、並の魔導師じや。あたしは使えるねんけど…範囲の設定とかが一人じゃやり辛いねん。人質に当たつてまつかもしれん」

悔しさと焦りが入り混じつた顔ではやでが言つ。

（アイツ達：人質とつて拳句に籠城かよ。しかも俺の恩人（いろいろと世話をしてくれたから）に迷惑かけるとは…許さん！俺が許さん！断じて許さん！）

俺は着ていた学ラン（転生前に着ていた服）の懐からギャレンバッклを取り出し腰に装着した。それを見てはやでが驚いた顔をした。

「何してるんやー並みの魔導師じやここで魔法は使われへん。アンタじゃ無理や」

そつ言つはせやでこ俺は告げる。

「魔法が使えないとしても…仮面ライダーなら何とかできるの…」

そう言つて俺はバッカルのレバーを引く。発生した『スピリチュアルレメント』を通過し俺は『仮面ライダーギャレン』へと変身する。その姿を見て軽く驚くはやで。まあ皆最初はそうだろうな。

（女の子は縄で縛られて奥の方に居るな。だつたらまずは人命救助が最優先！）

「はやて、俺が出て来たら中に向けてでつかいの一発頼む」

そう言つて俺は建物の中へ入つていく。「えつ、どつゆう事や！？」  
といつはやての声が聞こえたがまあ心配ないだひ…多分。

俺は建物の中へ入つた。案の定、奴等のお出迎えだ。

「イーッ、イーッ」

「悪いな、今はお前等と遊んでいられないんだよ！」

俺は迫つてくる戦闘員を無視して奥の人質へ向け走り出す。

「クソッ、邪魔だ！」

「「イーッ！」

道を塞ぐよつに群がる戦闘員を某アメフト漫画の如く必死で突破し

人質まで辿り着く。

「大丈夫か？ 待ってな、今助けてやるから… なつとー。」

俺は背後に迫ってきた戦闘員の腹にカウンターの右ストレートを打ち込む。決めてる最中に邪魔すんなっての。そして殴られた戦闘員は溶けて消えた。「うおっ、怖っ！」

俺はギャレンラウザーに「ジエミニゼブラ」のカードを切る。すると俺の隣に俺の つまり、ギャレンの分身が現れた。現れた分身は群がる戦闘員に突つこんでいった。

「アコイ囮役頼むぜ俺の分身！」

俺は女の子を抱えて建物から逃げ出した。

外に出るとはやてが騎士甲冑を身に纏い中の様子を伺っていたところだった。

「はやて、一発よろしくー。」

「分かった！」も刃以て、血に染めよ。うが穿て、ブラッティダガー！』

はやてが魔法を詠唱するとはやての周りに大量の短剣が現れた。それを中にいる戦闘員に高速で打ち出した。

放たれた短剣は見事に全弾命中し戦闘員と俺の分身は消えてなくなつた。

「よつしゅやー流石はやでだぜー！」

俺は変身を解除し、はやてに近寄る。はやても騎士甲冑を解いていた。

だがはやはては難しい顔で戦闘員がいた建物の中を見ていた。

「どうかしたのか？ もうアイツ達はいないぜ」

「分かつてる…けど何でアレは消えたんか良う分からんくてな。 アンタ知ってるか？ 名前呼んでたやん」

いやまあ知ってるんですけどね。 けど強化された人間なんて言つても信じてもうえないかな、 流石にこれは。

「まあ…アイツ達はショッカー戦闘員、 ショッカーフィア組織の下っ端要員だ。 けど…なんでこの世界にショッカー戦闘員がいるんだ？」

それが謎だ。 この世界にショッカー、 ましてや仮面ライダーが無かつたんだ。

何かがおかしいな、 これは。

俺はこの時まだ分かっていなかった。 俺が転生してきたことでこの世界が奴等によって恐怖に陥れられるなんて。

## 第四話 変身！仮面ライダー・ギャレン（後書き）

いろいろ酷い内容です。だが私は謝らない。

## 第五話 入学と親友と野望（前書き）

テスト追試だ――！――畜生――！――

今日は短めです。次回はなるべく長めにします。

## 第五話 入学と親友と野望

次の日、俺ははやての紹介でマリエル・アテンザ、愛称は「マリー」さんという人物に会つた。どうやら彼女がレイジング・ハートやバルディッシュにカートリッジシステムを組み込んだ人らしく、さらにはやてのシコベルトクロイツを製作したのも彼女らしい。

そんな彼女によつて俺のバツクルが解析された。まあ結局のところ、ブラックボックスが多くてあまり分析とか出来なかつたらしいがマリーさんはなんとバツクルにデバイスとしての機能を付ける、といった魔改造をしてくれた。正直この世界でデバイスがないといろいろとキツイのでありがたかつた。

(ここの世界に来てから女性に頭が上がらなくなつたな…)

嬉しい反面、こつ思えてしまつ俺であった。

その次の日に俺は第四陸士訓練校に入学した。細かい手続き等は事前に終わつていたので校長先生と少し話して俺はこれから生活する寮へと向かい荷物を置いてきた。そしてそのまま教室へ直行した。俺は本来の入学時期とは違うタイミングで入つたため一種の転校生的な感じになつていて、クラスで軽い自己紹介が終わるとクラスメイトに囲まれて質問攻めにされた。

「なあ、今までどんな所に居たんだよ?」「ジドか?それとも他の世界とかか?」

そのクラスメートの中でも一番馴れ馴れしく接してきたのがこの男、アッシュ・レーゲンである。

「俺はアッシュコつてんだ。以後お見知りおきつてね」

そのとき俺はふと思い出したことがあった。アッシュコといつもばどこかで見たような気がするのだが、と。

「アッシュコ？あれ、なんか知つてるよつたな気が…」

そつ言い少し悩む俺にアッシュコは人懐っこつたな笑顔を見せながらこう言つた。

「そつ、お前がこれから住む寮のルームメイト、それが俺だ」

「いや～ルームメイトが転入生とはなあ。これから面白くなつそうだぜ」「

寮部屋に入るや否や、アッシュコはそつ置いて備え付けのベッドに勢い良く寝転がる。それを見ながら俺もベッドへ腰掛ける。

「俺もだ。いろいろまだ分からなつことが多いからな。頼りにしてるぜ?」

そつ言つて笑いあう。俺とアッシュコは出会い早々意気投合し既に親友と言えるくらいの仲になつた

「早速明日から訓練だ。一真、お前は確かデバイスを持つてゐつて言つてたよな。ちょっと見させてくれよ」

「ん? いこせ... よつと、」んなんだ

俺はマリーさんに改造してもらったバッカルを見せる。するとアッシュは驚いた顔をして田を輝かせた。

「何だこれえ!...今まで見たことねえぞこんなのが凄え、何処で手に入れたんだ!」

アッシュは本当に驚いているよつてつきつこ「凄え!」と叫んでいた。

(神様に貰いました!...とは言えんわなwww)

「貰い物だ。俺もそこそこ詳しく述べるから問題ないだろ」「

そう言いバッカルを返してもうひとつそれらを小心翼に入れた。バッカル三つはデバイスとしての機能を付ける際に、携行性の向上のため小型化できるようにも改良されていた。マリーさん凄え。

「そりが、まあそこ等邊はまだいい。ただ明日からの訓練でヘマするなよ。連帶責任でルームメイトの俺までペナルティあるんだからな」

「分かってる。それにそれはいつの台詞だ」

「へッ、やつこなくっちゃ。よし、明日も早くから今日はもう寝るか！」

そう言つてアッシュはすくに寝てしまった。

「早すぎだろ…けど明日から頑張らなきゃなーよし、俺も寝るぜ！…オヤスマニー。」

その日はグッスリと寝て、結果一人共寝坊しました。

何処か分からぬ場所。その暗い空間で一人の男が話しかけていた。

「…では、我々に協力すると？」

「やつをせてもらおう…我々の目的の為に」

そつまうと辺りが明るくなる。そこには覆面黒タイツの戦闘員とそれよりも上位存在せある兵士 改造人間が並んでいた。

「なるほど…人間を素体としていながら良い出来ではないか。では頑張つてくれたまえ…我々と…」

「我が偉大なるショッカーのために…」

この出来事をまだ誰も知らない

## 第五話 入学と親友と野望（後書き）

後日、内容に加筆していくと思いますので今回はあめに見てください。

## 第六話 クロスレンジの極意（前書き）

遅くなつてスマッシュン！最近学校が忙しくて…これから復活してい  
きたいです けど来週模試だ～！

## 第六話 クロスレンジの極意

ここは第四陸士訓練校。そこでの訓練場の中央に一つの人物が戦っていた。仮面ライダー「ブレイド」と俺とクロスレンジ戦の教官であるダン・レントラーである。

「おりやあ！」

「フンッ…まだまだ甘いぞ小野寺…」

ダンはブレイラウザーで斬りかかった手を掴んで一本背負いで投げ飛ばす。

「ガアア！クソッ、まだまだあ…」

投げ飛ばされた俺は再び突進していくが今度は巴投げで投げ飛ばされる。

その後も次々と向かつていくもまるで赤子の手を捻るかのように俺は投げ飛ばされた。

「だらしないぞ小野寺！足腰がなつとらん！訓練場二十週、行けえ！」

「グツ…ウエーイー！」

俺は半ばヤケクソ気味に叫んび走つていった。その叫びは訓練場を走らされることに対する怒りではなく、ダンに手も足も出なかつた自分自身への怒りであった。

「アイツも何考えてんだか。あのゴリラ教官様は赴任してから4年間負けなしだつてのに。つーか化けモンかよ」

そう言つたのは一真のルームメイトであるアッシュュであった。彼は手にしたタオルで汗を拭きながら視線を一真から外し近くにいる他の訓練生に同意を促そうとするが

「ほう、じゃあその化け物退治はお前にやつてもらおうか

アッシュュは背後からの声を聞き顔を真っ青にし振り返つた。するとそこにゴリラ教官様ことダンガ「王立ちで立つていた。

「いや、さつきのは疲れからつに思つてもいない事を言つてしまつただけで決して本心から言つた訳では無くてですね」

「そんなに口が動くのなら体も動くはずだ。まあ次の組み手の順番はお前だぞ…たっぷり可愛がつてやるー」

「ヒイイイイーーーーー？」

アッシュュはそのまま連行されていく、その後寮に帰つてきたのは田にちが変わる直前だった。

俺が入学してからもう一週間になつた。流石に学校には慣れたが訓練の方はイマイチだつた。元々訓練などしていなかつたと言えばそれだけのことであるが今そんな甘い言葉は言つてられない。

俺は訓練の内容を思い出すが頭に浮かぶのはやはりクロスレンジ訓練のことであった。

「くそつ、手も足もでないなんて……！」

俺は唇をかみ締める。転生する前にやっていた剣道では負けはあってもこんなに無様な負け方は無かつただけにかなり悔しかった。そのときだった。

「ペペペペペペ」と携帯に着信があった。

「誰だ……？」

疑いながらも通話に出る。すると相手は

「もしもしし、小野寺さんですか？ ギンガ・ナカジマです」

「ギンガさん！ びっくり俺の番号を

相手はギンガだった。しかし一体何の用だ？ もう特に何も無いはずだが……？

「あの、明後日予定空いていますか？」

「明後日？ エーと、あ、空いているぜ。それがどうかした？」

明後日は訓練は休みなので寮でゆっくりするつもりだったので予定は無いに等しかった。

そう言つとギンガは「ではお会いできますか？」と聞いてきた。

(「これは裕二がトートとこうやつか！ いや、待てよ。実はそうじやなくてこいつらのぬか喜びつてこいつオチかも。けど喜んでもいいんだじゅう )

「一真さん、どうかしましたか？」

俺はつ！？いかん、どこか違う世界に行きかけてたぜ。浮かれすぎだ

何とか平穏を保ちつつ会話を再開させ、明後日の9時に寮の前に待ち合わせということになった。

では楽しみにします。それでは

一  
ああ、  
明後日に

そう言って通話を解除した。

そりいや女性と出かけたので何年ぶりだ？修学旅行の時も男達中  
とつるんでたし…まあいいや、そんなことは。とにかく明後日を楽  
しみにするか！

さて、さる事もないからもう寝み

カゞマヰサゞマゞゞツ！！」

ふと横を向いたらアッシュが恨めしそうに壁から半身を出してこちらを見ていたため思わず叫んでしまった。怖いわっ！

「おのれリア充め！貴様、女とデートなどさせんぞーー！」

「なつ！？何で知つてんだよ！」

「貴様が電話で話していたのを聴いたんだ！」

盗み聞きかよ！？なんて野郎だ！

アッシュは壁の角から飛び出ると「くたばれリア充ーっ！」と叫びながら俺に襲い掛かつてき。そのままマジで俺を殺る田だ。そこまで憎いかよ！

しかしアッシュは俺の親友タチだ、手荒なことさせたくない……どうする！？こんなときは…選択肢だ！

・倒す

・やつける

・殺る

「お前がくたばれボケがあーー！」

どうやら戦わなければ生き残れないようだ。だったらやつてやるぜ！返り討ちじやあ！

そのまま俺達は殴りあいに発展、その後間も無く駆けつけたゴリラ教官殿に成敗された。

約束の日の朝、俺は寮の前に出た。約束した時間より三十分も早かつた。

「流石に早過ぎたかな…まあいいや」

と言つぱり部屋に帰れない。帰つたら確実にアッシュに襲撃される

からだ。そんなことしてたら時間に遅れてしまうかもしれないからな。

俺はそのまましばらくボーッとしようとしていたがふと見えた人影を眺めたらギンガであった。

「おはよひざります、一真さん。待たせちゃいましたか？」

「おはよう、ギンガさん。大丈夫、待つてないよ」

そう言つとギンガは安心したような表情になつた。そして「今日はありがとうございました。まだ私からあの時のお礼をしていなかつたので」と言つた。

なるほど、そういうことか。つまり俺が勝手にデートと勘違いしたことか。はははは…畜生！

「別に良かつたのに…もう十分お礼をしてもらつたって」

入学金を一部払つてもらつたり飯奢つてもらつたりとか結構してもらつたけどなあ。これ以上されると逆にキツイつてゆうか…。

「でもそりగもしないと見えないので あつ、いや、忘れてくださいー！」

ん？ギンガが縮こまつてるが何か言つたのか。つい考え事してたら聞いてなかつたなあ…まあ本人が忘れてくれつて言つてるんだから別にいいか。

「で、では、行きましょうか」

「そーだな。あ、俺まだ市街地のこととか知らないから案内とか宜

しぐな

「分かりました」

「ひじて俺とギンガは街へと向かつた。

「ところで一真さん、もう学校生活とか訓練にも慣れましたか？」

ギンガに連れられ街に来て適当にぶらついてから俺達は休憩のために飲食店にいた。そして注文を待つている時にギンガがそう言った。

「まあ大分な…ただ訓練の方はちょっと

「どうかしたんですか？」

ギンガは心配そうにこちらを見てくる。が、正直に言つた方がいいのかそれとも笑つて流すか…いや、下手に意地を張るより正直に言つた方がいいな。訓練とかのキャリアは向こうが上だし。

そう思つたこれまでのことを話した。

「なるほど…つまりクロスレンジ訓練で一方的に叩きのめされた、と」

「グサッ…心にギンガの言葉が刺さつて痛い。

「ああ。どうすればあの教官殿に一泡吹かせてやれるのか…」

「…一真さん、あなたは接近戦は苦手ではないんですね。ですが、がむしゃらに突っ込んでいませんか」

ギンガが俺を見ながら言つた。

確かに無我夢中で突進していく感じはあったな。

「確かにその傾向はあつたな… そつか、だからいつも簡単に投げ飛ばされてるのか！」

「そうですね、多分動きが単じゅ 読み易かつたからですね」

ギンガ、言い直す意味無いぜ…。けど確かに俺つて単純な動きしか出来ないからな。言われた通りだ。

ギンガは軽く咳払いをすると再び話し出した。

「一真さん、クロスレンジの基本は『一手先を読む』ですよ。そのことを心がけてみて動いてみてください。そうしたら今までより動きやすいはずです」

「一手先を読む、か… 分かった。よっしゃ！ 次は投げ飛ばされたりしないようにするぜ！ アリガトな、ギンガ」

まさか年下のギンガに教えられるとはな、思つてもなかつたぜ。しかしもう簡単に投げられたりしないぜ、教官殿。

心の中でそう思つ俺だった。

次の日、いつも通りの訓練が始まった。大体の訓練はそれなりに出来るようになったのでさほど苦労はしていなかつた。そして最後のメニューであるクロスレンジ訓練が始まった。

(『相手の一 手先を読む。これを忘れないよつこ……』)

俺が心の中で念じてこる最中も次々と挑んでいた訓練生達は投げ飛ばされていった。そして俺の順番になつた。

「おつー真…氣を付けろよ……」

俺の前に順番だったアッショウが俺に話しかけてきた。ボロボロの様子を見る限りビリヤリーハントンパンにせりられたよつだ。

「分かつて。今日は一泡吹かせてやるぜ！」

「マジか…ま、せいぜい頑張ってくれ。俺は…ログアウトする

そう言ってアッショウは力尽きたかのように倒れる。俺は周りの奴等と一緒に適当に移動させると戦場いくばばへと歩いていった。

「まつ…跟つきがつもと違うな。これは楽しめそうだな

「やの余裕、消してやるぜー！」

そう言つと俺はベルトのレバーを引き、ブレイドへと変身しダン教官へと向かつていった。そして全力で殴りかかる。

「おこおこ、結局いつも通りかー？」

ダンはそれを簡単に避けるとクロスカウンターを狙つて俺の顔目掛けてパンチを打つ。今までの俺ならそれを喰らひ、一方的に攻撃されていただろう。だが

(『一手先!』)

「ウオオオオオ!!」

俺はそのパンチを姿勢を低くして回避して逆に体当たりをダンの胴体に喰らわす。

「グッ！」

ダンは一步下がる。そこへ追撃を掛けるようにキックを放つ。

「オリヤア！」

「ヌツ…フンツ！」

しかし俺のキックは受け止められ逆にダンのカウンターパンチが腹に決まりそうになる。

(これも予想済みだ！)

が、この展開を予想していた俺は左手でバリアを発生させそれをガードする。そして逆の手でブレイラウザーを持ち、斬りかかる。

「やるな…だがっ！」

しかしダンも伊達に教官をやつてはいない。一真と同じくバリアを発生させてブレイラウザーを受け止める。腹にキックを打ち込む。さうに追い討ちでハイキックを打ち込み最後はドロップキックを放つ。

それを喰らった俺は後ろへ飛ばされる。そしてなんとか受身をとつて立ち上がる。くそつ、ここはプロレスリングじゃないぞ。

「やるようになつたじゃないか。ビッグだ、次の一手でこの勝負を決めよひじゃないか。お前の体力が尽きないうちにな」

ダンが俺にそう提案してきた。

正直ありがたかった。俺もさつきは上手くいったが次も上手くいかか分からなかつたしな。それにダンの攻撃は確実に俺の体力を削っていた。それもチート並に。コイツ本当にココロラなんじゃないのか？

「後悔すんなよ..」

そつ言つて俺はブレイラウザーから一枚のカードを引きそれをラウザーに切る。

【キック、サンダー。ライトニングブласт】

「いくぜっ！ ウオヤアアア！！」

俺はライトニングブластを発動させダンに向かっていった。ダンも体勢を立て直し、手に魔力を集中させてカウンターの一撃を狙つていた。

「ウオオオオオ！」「ヌウゥン！」

そして一つの力がぶつかった。その先は覚えてない。  
寮の部屋だった。  
気がついたら

## 第六話 クロスレンジの極意（後書き）

まあボチボチ頑張っていきます~。

## 第七話 合同演習（前書き）

遅れすんません。なるべく早く投稿していきたいです。

## 第七話 合同演習

まだ日が昇った頃の時間帯。俺は一人ランニングをしていた。

「しかし、正直信じられねえな」

信じられないこと。それは先日のクロスレンジの訓練のことだつた。あの後氣を失つていていたが俺はなんとあの教官を倒したらしいのだ。

ギンガから”大切なこと”を教わつたこともあるし、ブレイドに登場するライダーは『装着者の感情によって融合指数が高まり強くなる』という仕様なため、あの時の俺の”勝ちたい”という気持ちに反応して一時的にだが強くなれたのだろう……と、俺は思つている。

「これで俺も一人前の魔導師に近づけたのかな」

その答えは俺には分からぬ。だから進み続けるんだ、一歩一歩先へと。

「よっしゃ、今日も頑張りますか！」

俺はそう言ってランニングのペースを上げた。

「今日は他校との合同演習だ。市街地での実践を想定で各校一人づつ、四人一組でのチームを組んでの演習だ。実践に近いから気を抜くなよー」

朝の訓練前の朝礼でダン教官が前に立つて今日の訓練の説明をした。まさかの他校との合同四人フォーマンセル一組か…なかなか面白そうじゃん。しかし一体どこの学校と合同演習なんかするんだ?そんな話一切聞いて無いぞ。

「ここの”情報発信局”の俺が知らない情報があつたとは…一生の不覚つ!」

何言つてんのお前? と言いたげな顔をして隣で頭を抱えてるアツシユを見る。大体いつからそんなあだ名があつた。そのとき、見知っている人物と遭遇した。

「ギンガ!?

「えつ… 一真さん!?

「まさか相手がギンガの学校とはなあ。知つてた?」

「いえ、私も昨日他校との合同演習があるとしか聞かされてませんでしたし。けど、一真さんがいてくれてよかったです」

「俺も。やっぱり知り合いがいると安心するしなー」

「ですよね」

「「ははははは (ふふふふふ) 」」

「俺もこいこと忘れてません! 何俺のここの空氣つぱり!」

横でアッシュが叫んでいた。まったくコイツはいつも五月蠅いなあ、少しは大人しくできないのかよ。ま、逆に急に静かになられちゃうれもそれで気持ち悪いが。

俺はふと、ギンガと一緒に付いて来た人物に目を向けた。どうやら女子生徒らしいがギンガの友達かな？

「あ、あのえと… わ、私はリイナ・ウェーバー、です… よろしくです！」

俺と田代が合った瞬間にその女性はかなりテンパって自己紹介をしていた。つかそこまで慌てる必要は無いんじや… それに最後噛んだなんですね、けど良い子なんですよ」

すかさずギンガがサポートをいれる。まあ悪い奴だとは思えないけどな。俺は分かる、こんなにテンパる奴が悪い奴なはずがない、ど。

「それは何となく分かるよ。んじゃ、とりあえずはこの面子で決まりか

周りを見ると大体の奴等はもう決まっているようだった。一応確認を取ると皆ア承してくれたため、このチームで演習に参加することになった。

「いいか、今日はこの廃墟地域が戦場だ。ルールは簡単、相手のチークを戦闘不能にしろ、以上！では初め！」

ダン教官の声が演習地域全体に響く。

どうやら俺達はランダムに配置されているらしく周りには他のチームはないようだな。

「じゃあ今のうちにデバイスとかを見せ合つて役割とか決めときましょ！」

とギンガが提案した。確かにそれもそうなので「それもそうだな」と相槌を打つとアッシュとリナも賛成してくれた。

「まず俺はこれ、プレイバッклだ。これを使うと俺は変身…まあこつなる」

俺はそういうバッカルを装着し、レバーを引く。そして『ターンアップ』の音声と共に現れた『スピリチュアルメント』をぐぐりブレイドへと姿を変える。

「ひやあっ！す、凄いです！こんなのが、始めて見ました　わあっ！」

この姿を初めてみたリイナは驚きながら、転んだ。え？何でここで転ぶんだ　ってこれは

「 B A N A N A ! ?」

どうやら驚いた表紙にバナナの皮を踏んだらしいが なんでここにそんな物があんの！

「おい大丈夫か？ よつと…」

とりあえず転んでいるリイナを起こす。つかこれは人見知りだけじゃなくてドジっ子属性持ちだよ、絶対。

「そんじゃ俺の番だな。俺はこの俺専用デバイス、その名もアッシュカスタム！」

そう言つて自信満々にデバイスを見せ付けるアッシュ。自慢のデバイスを見るとそれは ただのストレージデバイスだった。

「あの、これが専用デバイスですか？ 見たところあまり変わりは無いように思われますが…」

ギンガも拍子抜けしたらしくアッシュに訊いていた。だって専用つつても他の奴等の使つてるのと色がちょっと違うだけだもんな。

「いいんだよ！ 色が赤けりや 専用機で性能も三倍なんだよー！」

ギンガに指摘されアホなことを叫ぶアッシュ。つか言つとくがシザクは性能が三倍じやないぞ。せいぜい25パーセント増し程度だからな。三倍の性能ならガンムを軽く凌駕してゐるわ。

「じゃあ私ですね。私はこの『リボルバーナックル』と自分で作ったローラーです」

そつ言つて、ギンガは左腕と右足を少し前に出す。つかナックルも凄いが自作のローラーつてのがかーなーり気になるな。

「そのローラーつてどうやうの？」

そう俺が訊くと、「魔力を通して稼動するよつにしてあります。あとはウイングロードを展開させたりとかです」と答えた。多分ウイングロードってのはあれだ、空中を歩けたりするやつだろう。名前で想像付くぜ。つーかデバイスつて自作出来たり出来るのか…今度作つてみつか?

「じゃあ最後にリナ、お願ひ」

そつギンガに言われて「ふあいい！」とリイナが前に出てきておずおずと右手を突き出す。

そこにはデバイスが付いていた。一言で言つなら盾だ。タジャスピナーみたいな。おそらくはシャマルの『クラールヴィント』と同じような感じだろうから後方支援タイプなんだろうな。  
まあこれでフォーメーションが組みやすくなつたな。さてと、じやあ決めますか！

（三分後）

俺、ギンガ クロスレンジ  
近接戦闘

アッシュ、リイナ 後方支援

大体こんな感じになつた。特に反対意見も無いためこれで大丈夫だろう。さて、どつからでもかかつてこいや！

「あの、み、見つかつたりしませんかねえ？なんかそんな気がするんですけど…」

バカそれはフラグだ そう言つ間も無く攻撃が飛んで来た。どうやらやつぱりバレたらしい。こいつなつたら徹底抗戦だぜ！

「よつしゃー暨、後は手順通りに頼むぜ！」

そう言つて俺は相手のチームに突撃していきすぐにギンガも俺の後に続いてきた。俺とギンガの役目は言わば切り込み隊長つてどこだからな。

「よつしゃ、任されて！ いくぜ弾幕全開い！ スペルカードオーー！」

「そ、そんなに撃つたらす、すぐに魔力が尽きてしますよーーそ、それに後半の台詞はじ、自重してくださいー叩かれますーー」

早速ちょっと後ろが不安だが何とかなるだろ、そこに違いない、そういう思いたい。

「ギンガは右から、俺は左をやる」

「分かりました、気をつけて！」

そう言い合つと俺とギンガは左右に展開する。敵のチームは俺とギンガを視線で追うがその間に先ほど後方の一人が撃つた攻撃が相手の真正面に飛んでいった。

いいぞ、上手い感じに動きを制限させてる。これなら 置み掛けれる！

俺はすぐさま腰からブレイラウザーを引き抜き相手チームの先頭で攻撃を仕掛けようとしていた奴に切りかかる。

「うわああー！？」

ソイツはギリギリでバリアを発生させ、一撃を回避するも俺はパンチを放ち怯んだところをダン教官受け売りの一本背負いで投げ飛ばす。さらに俺はブレイラウザーに【キック】のカードをスキャンさせ【パー カロスキック】を発動させ強烈なとび蹴りを起き上がりかけている相手に喰らわした。相手の奴はB<sub>ジョ</sub><sup>バリヤジャケット</sup>も解けて気を失つてたためそのままバインドを掛けておく。

「つしゃあー次はどい」

『後方から攻撃が来ます。回避を』

俺の声を遮るように機械的な音声が聞こえた。俺は咄嗟に横つ飛びをして後ろを見るとそこにはデバイスの先端を俺に向けた相手の生徒がいた。その生徒は俺に魔法弾を発射してくるが、それをブレイラウザーで弾きながら俺は接近し、ラウザーでデバイスを払う。デバイスはそのまま宙を舞い俺の背面の地面に落卜した。

「ヒイツー！」

「…すまない」

(丸腰の相手に攻撃するのは気が引けるけど…実戦訓練だからな)

そう思いつつ【ディアーサンダー】を発動させ、気絶したとこをバインド。

(さうきの頃つてもしかしながら…プレイバックだよな)

以前にマリーさんに「デバイスの機能を付けてもらつたことを思い出しだした俺はバックルを見つめる。今まで喋つたりして無かつたからストレージデバイスかと思ってたぜ。

「助かつたぜ、サンキューな」

『当然のことです』

おおつ、話しかけたら反応してきた。つか日本語なのねコイツは。まあコイツとはこれから関係を深めていくとするか。ふと周りを確認するとどうやらギンガも相手を鎮圧していた。つか相手一人とも完全に伸びてるぞ、おい。

「お~い大丈夫だよな~」

声の聞こえた方を向くとアッシュとリイナがこっちに走ってきていた。

「どうよ、この俺の凄さはーあの弾幕の強さはー。」

相変わらずすぐ調子に乗る奴だが、後方からの援護には感謝しているのでこりは好きに言わせておくか。

「とにかくこの後はどうすればいいんですか？相手のチームの方々も放置するわけにはいかないですし」

ギンガがこちらを見ながら囁つ。確かにそうだな、どうすりやいい

んだらうつな……」これは脳内選択技だ！

- ・放置プレイ

- ・トドメを刺す

- ・嬉しくなるとつこ、ヤツチャウンダ

畜生、俺の脳内が死んでる。」これは他の意見に任せよう。

「やつぱつほりといづかへいろこのヒメンデイー」

「ですがやつぱり放置は……」

「いいんだよ！負けた奴が悪いんだよー弱肉朝食だよー。」

アツシユ、強食だ。

アツシユとギンガが若干揉めそうになりそうな気がしたため俺が落ち着かせようとしたとき、リイナが口を開いた。

「あの、先生に報告すればいいんじゃないでしょうか……」

「　　」

その手があつたか！

## 第七話 合同演習（後書き）

課外授業って面倒くやこよね。受けなきゃよかつた…

## 第八話 だつたら俺はこの赤い扉を選ぶぜー（内容とは全く関係ありませんｗｗｗ

いやー、ダルイねえ。宿題何にもやってないよーｗｗｗ

## 第八話 だつたら俺はこの赤い扉を選ぶぜー（内容とは全く関係ありませんｗｗｗ

あの後教官に報告したら「しまった、言い忘れていた。戦闘不能になつたチームはバインドで拘束。演習終了までそこで反省しておこうに」と言い、すぐ後に通信で全チームへ連絡がされたようだ。そうゆうことはしっかりやつてくれよ教官…。

「よ～し、んじゃここれからどうするよ。一狩り行きますか？」

そう言つてアッシュがデバイスを担ぎながら歩いて行こうとして、足元の瓦礫に足が躊躇して派手に転倒し、その拍子に壁に激突した。ゴンッ、という音とヒギヤッという声が同時に聞こえた。

「大丈夫かアッシュ！？」

すぐさま俺達はアッシュに近寄る。

（よかつた。大して外傷は無いみたいだ）

ざつと見てそう判断した俺はアッシュを起こす。痛がつていいけどコイツなら大丈夫だろう。

「アッシュさん大丈夫ですか？」

ギンガが心配そうに訊くので大丈夫だと言つたらギンガとリイナの二人とも安心していた。

アッシュも回復したようなので移動するためにアッシュがそこを立つた。するとそのぶつかつた場所に穴が開いていた。

「何だこれ？一体何の穴だ？」

ちょうど人がギリギリ入れそうな大きさみたいだ。うむ、何処に続いてるんだ？

「ちょっと入つてみるか」

「危ないですよ！一体何処に続いてるか分からぬのに！」

グッと、ギンガが俺の腕を掴んで静止させる　　って痛い痛い！！  
力強いってギンガさん！

「…わ、私が調べましょつか？」

俺が腕の痛みに耐えている隣でリイナがそう言つた。マ、マジか。  
この痛みに耐えてでも入るつてのか？

「頼めますか？」

「任せてください」

アレーー！？すんなり了承しましたねえ！俺みたいに腕掴まないの、  
凄え力で。

リナは魔方陣を足元に展開しスッと右手を突き出しバイスから球  
体を複数発生させてそれを穴の中に進入させた。

「何あれ？」

アッシュに訊く。

「エリーアサーチ。魔力で生成した「サーチャー」つづり、多数の端末を飛ばしてサーチャーから送信される視覚情報により、端末の届いた範囲全ての視認探索が可能とする魔法だ。」これぐらい基本だ

「まさかアッシュに魔法の説明されるなんて…チクシヨー…凄え悔しい…何でお前が知ってるんだよ！」

「アッシュもさうって以外に魔法のこととかの知ってるんですね」

やつぱりギンガも意外そうな顔してるな。まあコイツはパツと見てい勉強とかしないで遊び回つてそうな顔してるからな。実際その通りだけど。

「俺だつて勉強ぐらじするわ！一体俺をどんな風に見てたんだよ！」

「チャラ男」

「…回じく」

「テメ工等喧嘩売つてんのか！？上等だ、そんなら」

「踏さん！な、中に稼動している生産施設があります！」

アッシュの叫びを遮るようにリイナが声を張り上げて言つたため思わず三人とも固まつてしまつた。

「生産施設つて一体何のために？もつと詳しく説明できないか？」

「生産施設があるのが分かつたけど一体何を作つてるのか分からないからな。出来ればそこら辺を詳しく説明してもらいたいぜ。」

「それが、中心部にAMFが展開していて生産施設<sup>ブランク</sup>つてことしか分かりませんでした…」

事情は分かつたけどAMFといつ単語が理解できず俺は頭を捻る。あー全然分からんのひ。

とつあえず穴の中を覗く。真つ暗<sup>ブランク</sup>だが穴は下に続いていると分かると行ってみたくなるな。その生産施設がもし犯罪に使われているものだとしたら大変だしな。

「生産施設にAMFか…怪しいな<sup>ブランク</sup>」

「やつですね。ただの生産施設ならそんな上位魔法はいらないはずですか…」<sup>ブランク</sup>一旦教官達に連絡しますか？」

「やつしましょ、か、一真さんもい、良いですか？」

「ん?ああ、やつしてくれるか」

どうやら俺が穴見てる間に三人で何か話し合つてたみたいだな。まあこれは俺達よりも教官とかの方に任せた方がいいかもな。

「よーし、やんじゃ早速報告しようぜー」

そつ言つてアツシユがデバイスの柄で地面を叩いた。するとボンッ<sup>ブランク</sup>と三人の周りの地面が陥没して地下に落下していった。

「わやああああー…」

「ギャアアアアー！」

「何つ！？」

すぐさま走って手を伸ばす。その手は落ちかけていたアッシュの手を掴んだ。

「大丈夫かアッシュ！」

「だ、大丈夫だ！けど二人が！」

そう言つてアッシュは下を見る。土煙が上がってよく見えないけどどうやら一人はこの下に落ちたようだ。  
アッシュを引き上げた俺は一人を追つて最初に見つけた穴に飛び込もうとした。しかしそれをアッシュが止める。

「待てよー中にはAMFが張つてあって魔法が使えないんだぞ！俺達だけじゃどうにも出来ないって！」

「大丈夫だ、問題ない！お前は教官達に連絡をしてくれ

そう言つて俺は穴に飛び込んだ。魔法が使えないか、そりゃアイツも止めるわな。けど魔法は使えなくとも、ラウズカードは使えるんだよ！

「変身！」

落下しながら『スピリチュアルメント』を通過し、ブレイドへと変身した俺はブレイラーウザーを穴の側面に刺して落下速度を緩めながら下りていった。

(二人とも無事でいてくれよー。)

「…思つてたよりも深いな、20メートルぐらいか?」

地面に足が付いた俺は変身を解いて周りを見てみる。やつぱり何かの生産施設のようでいたる所にカプセルみたいなやつがある。中に生きているのかもよく解らない生物がいる…キモツ! それよりも落ちた二人を探すために俺は進んでいった。

「ここの高さから落ちて怪我とか大丈夫か?…」

何せこの高さだ。いくらバリアジャケットがあるからといって、もしかしたら怪我していてもおかしくはないからな。そう思つていた矢先、何処からともなく声が聞こえた。

「どうやらまだ侵入者がいたようだな」

「なつ! ?誰だ、何処にいる! 」

周りを確認しながら叫ぶ。だが何処にも声の主はいなかつた。

「貴様といい先ほどの小娘一人といい、どうしてこの場所が分かつたのか不思議に思つわ」

小娘一人…まさか! ?

「テメエ！一人をどうした！」

声が届いているのか分からぬのに叫ぶ。すると声の主は「この小娘の仲間か…面白い」と言うと、

「この二人を助けたくば、ここまで来い

と言つて一方的に話を中断させやがつた。そして一つの通路以外の明かりが消えた。

「誘つてるのかよ…上等だ！一人とも待つてろよ」

俺は全力で走り出した。

「二人は何処だあ！」

通路を進み明るい場所へと出た俺は真っ先にそう叫んだ。すると奥から奇抜な格好の人物が現れた。

俺はその人物を見て言葉を失つた。なぜならその人物は俺の知つている人物だつたからだ。

「お前は地獄大使！」

俺の前にはあのショッカーの幹部の一人、地獄大使が現れたのだ。そういうや前にもショッカー戦闘員が出てきたことあつたけど、コイ

ツが裏で糸を引いていたのか！

「又、貴様何故私の名を知っている？…まあいい」

地獄大使はそう言つと片手をバツ、と上げた。すると俺から見て右側の壁が左右に開いていった。

そこにはギンガとリイナが檻の中で倒れていた。

「ギンガ！リイナ！」

俺が一人を見て驚くのをみて地獄大使は高笑いをし始めた。俺はそれに腹が立ち奴を睨む。

「テメエ！一人に何をした！」

「何もしておらんわ。まあ…五月蠅いのを黙らせたがなあ

「テ、テメエ！」

俺はブレイラウザーの刃を地獄大使に向かながら言つ。

「俺はテメエを許さねえ！」

「フフフ、なら死ねい！行け、我が忠実なる僕よ！」

地獄大使がそう叫ぶと何処からともなく戦闘員、そして怪人が現れた。

「何つ！？怪人までいるのかよ！」

ざつと数を確認する。戦闘員は大体20人前後、んで怪人は13体

か。つーかコイツ等つて旧1号に倒された怪人じゃねえか！

俺はバツクルのレバーを引いた。発生した『スピリチュアルメント』が俺を通過し、俺は仮面ライダーブレイドへと変身する。

「その姿…貴様まさか仮面ライダーか！？」

地獄大使が俺を見ながら声を荒げて叫ぶ。俺はその問いに

「その通りだ！俺は小野寺一真、仮面ライダーブレイドだ！」

そう答えた。

## 第八話 だつたら俺は「」の赤い扉を選ぶぜー（内容とは全く関係ありませんｗｗｗ

地面が抜けた理由は次回で説明する予定なんで、ご都合とか思わん  
でくださいｗｗｗ

## 第九話 決意と奇跡（前書き）

なんか凄い焦つて書いたんでかなりメチャクチャですwwwサー...セン  
ww

## 第九話 決意と奇跡

「憎き仮面ライダーめ！殺せえ！」

「「「「ブワアアア……」「」」

地獄大使の叫び声が響く。その声に反応するように声を荒げながら戦闘員、怪人が俺に向けて突つこんできた。

「いっくぜええ！！」

俺も負けじと声を張り上げながら突進していく。本当はすぐに一人を救出したいのだがこの数が相手じゃそれは無理そうだ…それなら泡のように消えていく。

（速攻で片付けてやるぜ…）

正面から戦闘員が飛び込んでくるのをブレイラウザーで切り裂き、そのまま前にいる戦闘員×2をも切り裂く。切り裂かれた戦闘員は泡のように消えていく。

（相変わらず気持ち悪い死に方、だなっ！）

そう思いつつ、後ろに回りこんださそり男に右足でバックキックを喰らわす。さらにその流れで今度は右にいるヤモグラスを蹴り飛ばす。

このまま押し切れるか そう思つた俺は【スラッシュ】のカードを発動する。そして切れ味の上がったラウザーでサラセニアンを一太刀で切り裂いた。

「つしゃあー！」のまま押し切らせ　　」

「甘いなあ！」

ブシャアー！という音と共にそんな声が聞こえた、と思つた矢先であった。俺の体は謎の物体によつて縛られて身動きがとれなくなつてしまつた。

「これは…糸！つー」とは蜘蛛男か！？

俺が横を向くと案の定、そこには蜘蛛男が糸を口から出してゐた。

「その通りだ！これで貴様は身動き出来まい」

そう言つうと蜘蛛男や他の怪人が一斉に俺に襲いかかってきた。反撃しようにも両手は使えないし、魔法はA M Fで使えないし、足も縛られて上手く上がらない…正に万事休すだ！

「グツ！ガハツ！ガツ、グツ、グヘア！」

身動き出来ない俺に怪人たちの攻撃が次々と当たる。顔や胴体を何度も何度も殴られ蹴られた。そして立つことも辛くなり、その場に倒れてしまつた。

「トドメは任せな

そつ言われた怪人たちは俺の周りから離れていく。何故なのかと思ひ声が聞こえた方へ顔を向けるとそこには

トカゲロンが爆弾ボールを蹴る瞬間が見えた。

(ヤ、ヤバイ!)

そう思つても体は動かない。そしてトカゲロンはボールを蹴つて、それは俺に命中した。

ドガアアアン！！

そんな音が聞こえたと同時に俺の体は物凄い衝撃に襲われた。

そのまま壁に激突し、痛みのあまり声を張り上げる。もう意識がぶつ飛びそうだ。体を縛っていた糸も切れているが立つ力は残つてないだろう。

その姿を見て地獄大使は心底嬉しそうに言った。

「フハハハハ！ 所詮貴様等など我が偉大なるショッカーには勝てないのだ！」

そう言つて再び笑う。その憎たらしい顔に一発殴つてやりたいが体  
が言つ事を聞かない。

「フン。もういい、殺せ！…安心しろ、この二人もすぐにお前の後を追わせてやる」

そう言い地獄大使は檻の中の二人を見る。

その言葉を聞いた瞬間、俺の中の何かが弾けた。体の痛みなんて無くなつた。あるのは…怒りとも憎しみかも解らない不思議な何かだ。

俺は立ちあがり、叫ぶ。

お前等なんかに、一人を殺されてたまるか！」

すると地獄大使は俺を睨むよ」な目で見ながら、「言った

貴様一人で何が出来るといふのか？その身体で！」

「うるせえ！ たとえどんなに可能性が低くても！ そこに救える命があるなら！ 僕はそれを救いたい！」

声を張り上げて俺は叫ぶ  
そしてこれは自分へ言し置かせているよ  
うなものもある。

黒鹿黒鹿し。ならば

そこで地獄大使が何か言いかげたときであつた

「アーティスト」

そのような声が聞こえた。そして地獄大使の後ろにある大きな装置が光り始めた。

「な、何だ!?」

「これは…何事だ！？」

そして光が一瞬強まつた時、奥から一人の人物が飛び出してきた。  
そして二人は俺の前に着地する。

「！あ、あなた達は！」

その人物は俺が小さい頃から憧れていた人だった。

「き、貴様は…！」

地獄大使も驚いているようだった。

そして俺と地獄大使は囁らざも同時にこう言った。

「「ダブルライダー！」」

## 第九話 決意と奇跡（後書き）

はいー、ダブルライダー光臨ww

これは最初にやりたいと思ったことでした～、完全に自己満足です

ww

## 第十話 戦え！ダブルライダー（前書き）

「宇宙キターッ！」始まりました仮面ライダーフォーゼ！果たして  
どのような物語になっていくのか、これからに期待です！

## 第十話 戦え！ダブルライダー

「ええい、何故貴様等がここにいるのだ！」

地獄大使が声を張り上げて叫ぶ。すると一人は振り返り地獄大使を指差しながら言つ。

「お前の作戦は全て把握させてもらつた。お前が”平行世界”で組織の戦力を増やそうとする作戦を！」

「だが俺達には平行世界パラレルワールドに行く方法が無かつた……だが、謎の光に包まれたと思つたらこの世界にいたという訳だ」

謎の光……？詳しくは分からんが、その光が一人をこの世界に連れて来たのか。スゲーな、おい。

地獄大使は「おのれえ！」と低く唸ると残つている怪人及び戦闘員に向けて命令をとばす。

「全員生かして返すなあ！かれーっ！」

一斉にこつちに怪人や戦闘員が向かつて來た。

俺は戦うために前に踏み出す、しかしそれを二号に制された。

「つー何故です！？」

「二号は俺達に任せな。それよりもあの二人を助けてやれって

そつ言つて二号は一人が閉じ込められている檻を手で指しながら一号と共にショックカー怪人達に向かつていった。

俺はそれを見届けるとすぐに一人が閉じ込められている檻に向かつ

て走り、檻の前に来てブレイラウザーで鉄格子を斬り中に入つて二人に駆け寄つた。

「二人とも大丈夫か！？ギンガ！リナ！」

二人に呼びかけながら、怪我などが無いか確認する。よかつた、特に外傷は見当たらない。

するとギンガが意識を取り戻し、直後にリナも目を覚ました。

「か…ずま…さん？どうしてここに…？」

「勿論助けるためだつて。けどこんな展開だとと思わなかつたぜ」

と言つた矢先、「コブラ男が檻の中に進入してきた。

俺は一人を庇うように立ち、ブレイラウザーから【ビートライオン】を取り出しきゃんする。

コブラ男は炎を発射しようと構える その隙に俺はラウザーをヤツ目掛けて投げた。予想外のことにも動搖したのかコブラ男は回避行動をとらず、ラウザーはヤツの頭に刺さる。

「グギヤアアア！」

「これで…トドメだあーっ！」

既に【ライオンビー】を発動していた俺は接近し刺さつたラウザーを引き抜くのと同時に逆の手で渾身のパンチを決めた。

「グビヤアアー！」

断末魔を上げつつコブラ男は爆発する。その音に気付いた怪人や戦

闘員がこちらに狙いを定めてきた。

「ヤベッ…一人ともここに隠れててくれ！絶対近づけさせないから！」

そう言って俺も檻から飛び出して迫り来る戦闘員や怪人たちを迎撃する。すれ違いざまに戦闘員を切り裂き、正面にいる蜂女の剣での攻撃を捌く。

そのまま鎧迫り合いになっていたときである。蜂女が体勢を崩したというよりも別の場所から攻撃されたような感じで

(まさか！？)

檻の方を見るとそこにはB-<sup>バリジャケット</sup>を装着したリナがスティングガーレイで蜂女に攻撃していた。

しかしそこにギンガの姿は見えなかつた。何処にいるか探そうとしたときに蜂女が苦痛の声を上げていた。振り返るとギンガが蜂女にリボルバーナックルでの一撃を決めていて、殴り飛ばされた蜂女は壁に衝突して爆発した。つーか俺よりも威力高くな…？

「一真さんだけに戦わせるわけにはいきません。私達も戦います」

そう言いながらギンガはこちらに振り向く。

「も、元々私達のせいでのことになつてしまつたので…自分の身ぐらいいはなんとか」

リナもそう言いながらやつて來た。二人とも決意の固まつた目をしていた。

こうなつたら言つても聞かなさそうだな…一人を信じよう。

「…分かつた。けど絶対に死ぬんじゃねえぞ！」

「トウツ！」

一号は高く飛び上がり空中で前転をし、必殺のライダー・キックを蝙蝠男に決めた。蝙蝠男はライダー・キックを喰らつてきりもみ落下していき、爆発した。

二号も渾身のライダー・パンチを蜘蛛男に決めて倒していた。ダブルライダーの実力の前に次々と怪人、戦闘員が倒されていき、残るは僅かな戦闘員とゲバコンドル、トカゲロンの二体の怪人だけになつた。

「地獄大使！お前の悪事もここまでだ！」

「大人しく俺達に倒されな！」

ダブルライダーがそう言つと地獄大使は悔しそうに唸ると鞭を地面に叩きつけて叫ぶ。

「おのれえ！戦闘員、例の手段だ！やれえ！」

地獄大使がそう言つた瞬間、戦闘員達がライダーに纏わり付いてきた。

「くっ、何のマネだ！？」

「コノツ、離れる！コイツ等！」

ダブルライダーは引き離そうとするが戦闘員は離れない。ソレを見て地獄大使は言った。

「では味わつてもらおう…人間爆弾の威力を！」

そう言つた瞬間、ライダーに纏わり付いていた戦闘員達が一斉に爆発した。

「「ぐわあああ…！」」

ダブルライダーは爆発に吹き飛ばされて転がる。木つ端微塵になることはなかつたがダメージは大かつた。

「フハハハハツ！良いザマだ。さあ、トドメを刺せ！」

そう言われてゲバコンドルとトカゲロンはダブルライダーに接近する。ダブルライダーもなんとか立ち上がりうとするが間に合わない！

「コロコロトド…『させるかーー…』グヘアツ！」

しかし、ゲバコンドルが飛びかかるうとした瞬間に何者がそれを妨害した。一体誰なのか？ そう思つた1号は顔を上げた。そこには

「テメエ等の相手は俺達だぜ！かかつてきなー！」

一真、ギンガ、リナの三人がダブルライダーを庇うように立つてい

たのだつ  
た。

## 第十話 戦え！ダブルライダー（後書き）

相変わらずの「」のクオリティ、一向に成長するどころか劣化していく  
てる気がする…。

## 第十一話 決めりー奇跡のキック（前書き）

相変わらずのグダグダクオリティでいりますwww

## 第十一話 決める！奇跡のキック

「いくぜえ、テリヤアア！」

俺はゲバコンドルに斬りかかる、がそれはあっさりと避けられ逆に反撃のパンチを貰う。だがそれによって僅かな隙が出来た。

「そこです！」

ギンガのリボルバー・ナックルがゲバコンドルの脇腹に決まり、大きく吹っ飛ぶゲバコンドル。俺はとくに倒れつつ受身を取り威力を減らした。

「サンキュー、ギンガ！ いくぜええ！」

勢いよくゲバコンドルに突撃し、ブレイラウザーで斬りつける。先ほどのギンガの一撃で怯んだゲバコンドルに連續で斬撃が命中していく。全身に傷を負ったゲバコンドルは空中へ逃げようとしたが足を持つて引きずりおろした。

「グツ、キサマ！ サツキトハツヨサガガチガウゾ！」

息も耐え耐えになりつつもそう言いつぶやくゲバコンドルに俺は叫ぶ。

「俺は守れるものが存在してる間は全力全開になるって決めてるんだよー！ テメエ等なんかにやられてたまるか！」

そう言つてラウザーを倒れているゲバコンドルに全力で突き立てる。その一撃でゲバコンドルは完全に絶命した。

俺はラウザーを引き抜くとトカゲロンの方を見る。トカゲロンの方はリナが足止めをしていたが状況はリナの方が部が悪いようだつた。

「ス、ステインガーバレット！」

リナの『アルテミス』から大きな目の魔力弾が発射され、ソレはトカゲロンの目の前で大きく拡散し全身に小さい魔力弾が命中する。

「グ……ソンナモノオ！」

だが強力なAMFが張られている状態では全力では撃てなかつたのか、トカゲロンには大きなダメージは入らなかつたようで怯みはしたが仰け反らせるまでには至らなかつた。

反撃にトカゲロンは爆弾ボールをリナに向けて蹴る。

「ブ、プロテクション！」

素早く『アルテミス』を突き出し、発生したバリアで爆発と衝撃を耐えるリナ。だがトカゲロンは何所からともなく大量のボールを出し、連續で蹴る。

「キヤツ！ま、まだ持つてください…アルテミス！」

リナがそう言つと『アルテミス』の表面にあるコアが光り、バリアがより強固な物になつた。トカゲロンは中々壊せないバリアに苛立ちを感じ始めていた。しかしボールもラスト一個になつてしまつた。そこに俺とギンガが駆けつける。

「よく持つてくれたぜ、リナ！後は俺任せろ！」

俺はリナとトカゲロンの間に立つ。

そういうやコイツの爆弾でスゲー痛い思いをしたなあ……ちよつとじぐらいお返ししてやりたいぜ。

「来いよトカゲ野郎。御得意の爆弾ボールでよ」

そう挑発をするとトカゲロンは物凄い剣幕で怒りだした。全く単純な野郎だ……俺も人のこと言えるか分からんが

「キサマア！ ユルサンゾオ！」

そう叫びながらヤツが爆弾ボールを蹴ろうとした瞬間、俺はどっておきのカードをスキヤンする、それは

「シネエエ！」

【マグネット】

【バッファローマグネット】それは周りの金属を引き寄せたり離したりする効果……所謂磁石の効果を得るカードだ。何故そんなカードを使ったのかというと

「ナ！ ボールがアタッテナイダト！？」

そう、ボールを磁力で反発させているのだ。

俺はボールの形状、色などからボールの表面が鉄であることを予測し、このカードを使ったのだ。つか、もし違つてたらどうなつていたのか……怖いから考えるのはやめよう……。

「そらっ、お返しだ！」

そして反発する力を強くし、勢い良くボールを弾き返す。ボールは見事にトカゲロンの腹に命中して爆発を起こした。

トカゲロンの断末魔が爆発音に消えていった。これで全ての戦闘員、怪人を倒したことになる。

俺は最後に残っている地獄大使に向いて視線の先に向けるとそこには立てるほどには回復したダブルライダーもやつて来て隣に並ぶ。

「どうやら怪人は全て倒したようだな……礼を言わせてもらつ」

「アレを全部倒すとは中々骨のある奴みたいだな」

言いながらダブルライダーは構えを取る。

そう言つてくれるのは嬉しいんだけど、倒せたのは俺だけの力じゃ  
ない。

「仲間がいたからですよ。信頼できる仲間が」

そう言うと二人は仮面の下で笑つたような気がした。俺もつられて笑つてしまう。

「ええい、恥々しい奴等めー。」  
「なればワシ自らがー。」

そう言うと地獄大使の姿が変わり、そこにはガラガランダが立つて  
いた。

「くたばれライダーども！」

高台にいたガラガランダは下に飛び降りて、鞭のような腕を振り回し俺達を攻撃してきた。

「うおおつー！」

「トウツー！」

それを俺は前転で、ダブルライダーは飛び上がってソレを回避した。俺は立ち上ると同時にガラガランダへと走り出す。

「ウホーーイー！」

「グッー！」

ガラガランダに肉迫した俺はブレイラウザーを逆手に持つて斬り付けた。ガラガランダは呻き声を上げ俺から距離をとった。それに乗じてギンガとリナも攻撃を加え始めた。

「私達もいきましょう、リナ！」

「はいーー！」これまで練習したあの技をやつてみましょー！」

するとリナはステインガーレイをガラガランダ ではなくガラガランダに接近するギンガに打ち出した。俺は意味が分からず叫び出す

「はーー？ なにやつてん

「

「大丈夫です！」

「

そう言つたギンガは向かつて来るスティンガーをなんとリボルバー ナックルで方向転換させガラガランダへ打ち出した。しかもそれは ギンガの魔力とリボルバー ナックルの威力を上乗せしたものだ。

「何い！？」

ガラガランダもこれには驚いたようご回避を取るのが少し遅れてし まい直撃を喰らつ。

「今だ一文字！」

「おう、いくぞ！」

「「ライダー ダブルパーントチッ！！」」

そこへ先ほど飛び上がつていたダブルライダーが落下しながらライ ダーダブルパンチをガラガランダに繰り出す。  
それを喰らつたガラガランダは後ろの装置の近くまで殴り飛ばされ た。

「グヌウウウ…まだだ！」

意氣も絶えたえになりつつ立ち上がるガラガランダ。その前に俺と ダブルライダーが揃い立つ。

「そろそろトドメの一撃といきましょ、二人とも」

そう言つて俺は【ライトニングブласт】を発動させ、飛び上がる。 するとダブルライダーも同時に飛び上がつていた。

「いくぞ一文字！」

「おう、本郷！」

「「そしてこの世界の仮面ライダー！」」

それは偶然だつた。

俺の【ライトニングブラスト】とダブルライダーの『ライダーダブルキック』が同時にガラガランダに決まつたのだ。  
俺達は自然とこう叫んだ。

「「ライダートリプルキック！！」」

奇跡の必殺技を喰らつたガラガランダは蹴り飛ばされ、そのままこの世界にやつてくるために使つた装置にめり込む。  
その衝撃で装置のスイッチが入つたらしく、バチバチと音を立てながら光りだしていく。

「お…のれ、か…仮面、ライダー…」

そう言つて地獄大使は元の世界へ転送されていった。

「本郷さん、一文字さん、ありがとうございました。おかげで一人を助けることが出来ました」

「俺は変身を解いて一人に近寄る。すると一人も変身を解いて俺と向き合つ。

「俺達は何もしていない。助けたのは君自身だ」

「俺達はただ怪人と戦つてただけだ。謙遜すんなつて」

本郷さんは静かに、一文字さんは俺の肩をバシバシ叩きながら言つてきた。つて、一文字さん、肩痛いって！力入れすぎ！

「ててて……といひで地獄大使はどうなつたんですか？」

痛む肩を押さえつつ問う。すると一人は険しい顔になつて答えた。

「ヤツはまだ生きている…俺達の世界でな」

本郷さんは言つ。一文字さんも頭を搔きつつ「アイツ等しづといからなあ」と言つていた。

それじゃ、やつぱり一人は「仮面ライダーが存在する世界」から来たことになるのか…？クソッ、難しい話は分からん！

「俺達のことは心配すんなつて。きつちし自分の世界は守るからよ」

一文字さんはそう軽そうに言つてるけど…実際は地獄のよつた戦いが続くことになるんだろう？そんなのつて…

「俺達はショックカーには負けん。世界からショックカーの魔の手が消

えるまで戦い続ける

そう言つてゐる本郷さんの体は透け初めていた。

「なつ、どうしたんですか！？」

驚く俺に對して冷静に本郷さんは答えた。

「俺達も元の世界に帰らねばならないのだろう……まだ戦いは終わつてないからな」

「そうじつことだ。まー大丈夫だ」

そう言つて文字さんの体も透けだしてゐた。  
すると本郷さんは俺に訊いてきた。

「君の名前は？」

俺は悲しい気持ちを抑えつつ答えた。

「俺は小野寺一真。仮面ライダー・ブレイドです！」

そう答えた直後、一人の姿は消えていた。

## 第十一話 決めりー奇跡のキック（後書き）

はい、ようやく戦闘終了です。

この展開は連載当初から考えていた展開でしたね、ようやく終えることができました。

次回は他のなのはキャラとの話です。

そんじゃ、サイナラ～！

## 第1-2話 ひじりの半纏(前編)

俺、しぶとく参上ー

つてことでしぶとく生き残っています。

## 第1-2話 ひとりの半纏

「一真さんあの…ありがとうございます。助けに来てくれて「か、一真さんとあの方達が来てくれなかつたら今頃はどうなつていたか…」

ギンガとリナが俺に近づいて来て言つ。

「ん?ああ、気にするなつて。仲間を助けるのは当然だろ」

別に格好付けた訳でもなく本当にそう思つてることだ。仲間は助け合いでしょ。  
そつ言つと一人ともイマイチ納得してないような顔になる　つてあれ?

「ウツ…」

ヤベ…身体中が痛え…無理、しそぎたか…。

「「一真さん!…?」」

一人が驚いたような声が聞こえたのを最後に俺の意識は途切れた。

その後、俺達はアッシュが呼んでくれた教官達によつて無事救出された。

そのまま病院に搬送された俺は4日間眠り続けていたようだ。しか

もあれだけボコボコにされたのに特に目立つた怪我は無く、その後3日ほど入院してから退院した。

医療などには詳しくないのでそれが凄いのかは解らないがともかく退院できたことは喜んでもいいと思う。ギンガやアッシュ達も見舞いに来てくれてカーなーりー、嬉しかったしな。

(しつかし、退院直後に呼び出しつてのは…)

「ちょうど病院から出たところで「迎えを用意しとるから早くきてくれんか」と関西弁で言われ、声が未だに耳に残っている。退院したことに関して一言も無しかよ、などと思いつつ迎えに来ていたヘリコプターに乗り込む(ちなみに初めて乗った)

「…で、何で俺はここに呼ばれたんだ?」

俺は前と同じく聖王教会本部、それも初めてカリムと会った時と同じ部屋に居た。

「何でつて…それは自分が良く分かつてることやう?」

紅茶やクッキーなどが乗ったテーブルを挟んで俺の向かいに座るはやでが言つ。その顔と声は真剣味を秘めていた。

「貴方達が落ちた先にあつた場所のことです。調査したところ、何か実験施設の様なものが残されていました。あの地下には何があつたのですか?」

はやての隣に座るカリムが手にしていたティーカップを置きながら俺に言つてきた。同じくこちらも真面目な顔で聴いてきた。  
やつぱり「わゆう」とか…この世界じゃショッカーはいなかつたも  
んな。

俺は一口紅茶を飲んで話しあう。

「違つ世界にあるショッカーって名前の組織の研究施設があつたん  
だ。ショッカーは人類を脅かす程の科学力を持つていて世界征服を  
目的として活動してたんだ」

「それつてもしかして前に言つてた”ショッカー”と同じか？」

「ああ。そしてショッカーは…人々を捕らえて”改造人間”として  
自分たちの配下としていたんだ。脳改造でショッカーに忠誠を誓わ  
せてな…」

はやての問いにそう答える。すると一人はあまりの事実に声も出さ  
ずに驚いていた。それもそのはずだ。あれが特撮じやなくて実際に  
起こつてることだとしたら俺もこんな感じになるだろう。  
しかし実際にショッカーはいた。そしてダブルライダーも。

「それで…ショッカーはどうなったん？」

はやては険しい声で聴いてきた。

「脳改造を免れた改造人間…仮面ライダー1号、2号…通称ダブル  
ライダーによつて壊滅した」

（あの時どうして二人が来たのか理由は分からぬが、二人が来な  
かつたら今頃俺達は…）

自分の無力をに怒りがこみ上げて来た。俺にもっと力があれば…。

「しかし一真さん、この世界になぜ壊滅したはずのショッカーの研究施設が？」

「えつ…ああ、詳しく述べ分からぬけど…多分ライダーによつて壊滅せられるよりも前の時間から来んだと思つ。それなら納得できる」

カリムが話しかけてきたことで我に帰つた俺はカリムの問いに答える。

「それでこの世界にやつて来たショッカーは一真さんが撤退させた…といつ」とですね」

「いや…俺だけじゃない。ギンガトリナ…そしてダブルライダー、皆が一つになつて倒せたんだ。一人じゃ無理だつた」

おそらく地獄大使は元の世界に戻つたはずだ、だが今頃はダブルライダーに倒されているだろう。

するとカリムは考えるような表情をし、俺に言った。

「おそらく以前に私が預言者の著書で予言した<sup>プロフェーティン・シリフテン</sup>”異なりの空から黒き意思現る”といつのはその組織のことでしょう。そして予言通りに貴方が打ち倒したといつ」とです」

「やつなのか…あの時はそんなことを考えてる余裕なんか無かつたぜ

元々予言のことをあまり気にしてなかつたうえあの状況だ。余計な事考えるのは無理だ。

「とりあえず現状は大丈夫みたいやな。けど念の為にもう一度調査をしてみよか。今度は私も現場に行つて確認したいしな…それじゃカリム」

そう言つとはやはカリムと田配せする。一体何だ?…と思つた矢先であった。

「一真、退院おめでとうな」「一真さん、無事退院おめでとうござります」

「ウフ…?」

不意を浸かれた一言で驚くあまり変な言葉が…いや、このまま何もないものだと思っていたからな。完全に不意打ちだった。

「…」改まって言われるとな…けど、ありがとウ

これでこの事件のこととは一段落着いた。

その後俺は先に部屋を退室した。といつのも一人はまた別のこと色々と話したいこともあつたようだ、「あんたと話をしてみたいって人があるから会つてきたらどうや?」とはやてに言われたからである。決して邪魔者扱いなんかじや無いんだからな!つか前にもこんなことがあつたような…。

「ヤレの少年」

特に田配も無く適当に通路を歩いてると誰かに声を掛けられた。この声は女性かな~なんて思いつつ俺は振り返った。

「はい、何ですか」

そこまで言つたところで動きが止まる。  
なぜならそこに居たのはヴォルケインリッターの一人、剣の騎士こ  
とシグナムであつたからだ。

「人違ひだつたらすまないが、君は小野寺一真か？」

「は、はい。俺が小野寺一真です！」

あのシグナムに話かけられたせいで俺の声は見事に裏返つてしまつた。そんな俺を見てシグナムは不思議そうな顔をしたがそのまま話を続ける。

「いきなり声を掛けてしまつてすまなかつた…君の話は主から聞いている。それで一度話してみたいと思つていたのでな」

「そうだつたんですねか。ところで一体はやてさんはどうな事を言つていたのでしょうか？」

つい呼び捨てにして訂正する。はやは俺よりも立場がかなり上だから本当は呼び捨てなんてダメなんだろう、それにはやてを主とするヴォルケインリッターの前でなんて死亡フラグが…！  
内心ビビる俺を見てシグナムは

「主が呼び方については何でも良い、と言つていたので気にするな」と言つた。あー良かつた。

「それで主が言つていたことだが…君が他の世界から来たこと、そ

して”仮面ライダー”たるモノになる」とぐらうだ

やつぱり話してたか…ま、特に隠すじだわりとか無いから問題ないが。

「やつですか…といひでシグナムさんばかりで何をしているんですか？」

「ああ、主の警護だ…と言つても今は警護の必要はないので暇を持て余していたといひだがな」

シグナムは苦笑して答えた。といひことは今なら稽古でもせつけられぬか？

（今べらにしか頼めるチャンスは無さうだしな…）

「シグナムさん、お願ひがあつます

「む、何だ？」

そういうとシグナムは真面目な顔になつてこちらを見た。それを見てやつぱり真面目だなあ、など思つてしまつた。

俺は誠意を込めて言つた。

「俺と…戦つてくださいー強くなりたいんです！」

そう無茶だと思われることをいつとシグナムは考えるような表情をし、

「いいだろ、だがその理由を聞いたい。くだらん理由なら…一度

と剣を交える」とは無い」

と、言つた。そう言われて俺の脳裏に一週間前のあの出来事が思い出された。

あのとき俺はダブルライダーが来なければ負けていた。そして二人も助けられなかつた。あれはある意味”偶然”だつたのだ。

そんなのは嫌だ。偶然で勝てただけじゃ…誰かを助けれない、守れない。助けたいのに助けれない。

だから強くなりたい。あんな奴らに負けないぐらいに強くなりたい

…！

「助けたい人を助けるようにです。思いだけじゃなくて、せめて助けられる力だけでも欲しいんです！」

俺は言つた。それは嘘偽りの無い本心の一言だ。

シグナムは一旦眼を瞑つた後こいつ言つた。

「ふむ…助けるための力か。その気持ちと力は一步でも意味を履き違えると逆に助けるどころか苦しめることになる…その意味を間違えないようにしろ」

そつ言つとシグナムは歩き出した。

(やつぱりダメか…)

そう思つているとシグナムは振り返り言つた。

「何をしている?戦つてくれと頼んだのは自分である」

そう言われて俺に嬉しさがこみ上ってきた。あのシグナムが俺と戦

つてくれるというのだ！こんな出来事、嬉しいわけがない。  
俺は前を行くシグナムの後をすぐさま追った。

## 第1-2話 ひじりの井戸（後編）

誤字脱字等は気付きましたので訂正していきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2177s/>

---

仮面ライダー×リリカルなのは 転生者の名は仮面ライダー  
2011年11月17日20時15分発行